375.9
Y019
資料室

第一部用

十卷

東京
光風館藏版

42625
教科書文庫
4
810
51-1931
20000
54280

資料室

教科書文庫
4
810
51-1931
2000054280

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

吉田彌平編

師範國文

第一部用

卷十

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000054280

375.9
Y019

広島大学
教
54280
図書

近江之平浦

後嵯峨宮御宇天皇代

天豊財重日足姫天皇
位後即後嵯峨宮

額田王歌

熟田津乎船乗世武登月待者潮毛可奈比沼
今者許藝乞菜
なのりそをふねのりせむとつきまてはしほもかなひぬいまはこぎこな

師範國文 第一部用 卷十

目次

一 文學論……土田杏村 一頁
二 寧樂の匂……〔萬葉集〕 九
三 歌の調子……島木赤彥 二〇
四 素戔嗚尊……武田祐吉 二八
五 天石屋戸……〔古事記〕 四〇
六 忍坂の大室屋……四九
七 上古の詩歌……藤岡作太郎 五三
八 大丈夫の覺悟……幸田露伴 六一

國文學史……六七
序說……六七
一　上古の文學……六八
二　平安時代の文學……七三
三　鎌倉室町時代の文學……八五
四　江戸時代の文學……九六
五　明治時代の文學……一一
六　大正時代の文學……一一〇
七　現代の文學……一二八

目次終

師範國文　第一部用　卷十

一　文學論

文藝家　土田杏村

土田杏村
哲學者
名は茂
明治二十四年新
潟縣佐渡郡生

人間は何故文藝を創作するのであるか。何故此の生みの苦しみを敢へて冒すのであるか。さう反問して見たところで、人間はたゞ根本的にさういふ文藝を創作しないでは居られぬ本能を持つからと答へる外は無い。書くこと自身が人間の本能だ。我々は書いて人生を再現して見たい。また己自身を告白して見たい。己自身を塑像的に凝結して見たい。己の外に己の影

を眺めて見たい。創つた美しさを受容れて見たい。たゞさういふ已むを得ない人間の本能から創作するものが文藝だ。他の動物にはさういふ衝動は動かないであらう。また動いたにしても、其の程度はあるか無いかの極めて微弱なものに相違ない。藝術を持つものはひとり人間だけである。

河邊の蘆は風を感じて自ら鳴る。其の如く歌ふのが詩人といふものだ。文藝家ほど強く自らの財産に賴るものは無い。天分無ければ文藝家は已むのである。文藝家が作品を創作するのは、言はゞ其處に一つの新らしい世界を創作するのだ。藝術家とは、畢竟天を承ぐものだ。併し文藝家は所謂「それ自身創られたものにして、また同時に創る」ところの自然である。隨つて其の所産は神のそれの如くに無偏であるを得ない。それには

それ自身
中世の哲學者ジョン、スコートス、エリューゲナ（八八〇頃歿）の言葉

作家の小さな、人間らしい煩悶が現れる。人間なればこそ解決し得ないで、惱む問題も現れる。すべては現實的の惑と愚に小さい主觀とにより支配せられて居る。

たゞ作家は其の創つた世界の中で彼が現實的になし能ふ最善の生活を營まうと努力する。作家は人生の中で最善の生活を營むことに不撓の情熱を抱くものでなければならぬ。彼は個人的に人生一般の問題に觸れる。また同時に社會の問題に觸れる。此に於てか作家は「自ら鳴る蘆だ。」といつてひとり心に晏如たるを得ない。彼は進んで其等の問題を考察し、體驗することに努力しなければならぬ。かくして最後に、我々の何處までも小さい主觀は其の小さいまゝで許されるところを見出す。それが許された時に主觀は大きなものと結び附き、我が身の人

間らしさは始めて彼のものとなるであらう。文藝家は、絶對自由の意識に於て創作する。しかし文藝家自身の生活と、彼の住む社會とは、常に必ずしも絶對に自由では無い事を作家は決して忘却してはならない。

文章道

文藝のすべては描寫である。描寫のすべては文章であると私は言はう。文章の拙劣な文藝といふものはない。文藝家は第一に文章道に於て至る處がなければならぬ。文藝を味はふものも亦其の最後は文章を味はふことに於て至るものでなければならぬ。

文章道に重要なことは、第一に其の文格の亂れた文章は、既に其の氣品に於て缺けるところがある。恰も狂人を見るが如くだ。

併し格とはいたり、とほる事である。濫りに型に拘泥することではない。中に於て一貫する精神が格である。語法は平易でなければならぬ。語彙徒に難澁であり、文章の筋至るところ反撃衝突するものであれば氣品其の間に碎け、文章の韻も亦何時の間にか消散する。文格を守ることは、文章を平易ならしめることのために正確でなければならぬ。文格亂雜なるものは、既に一箇の文章として立つを得ない。語法の主客に注意を行きわたらせ、また其の受繼ぎに語法の表と裏とを鑑別しなければならぬ。文章には必ず其の何れかに力點が置かれなければならぬ。徒に力點多ければ、却て生彩と氣力とを缺く。韻がなければならぬ。強みを持たなければならぬ。呼吸する所がなければならぬ。時代と共に移る所がなければならぬ。

要するに文章道の本義は、純粹なることにある。支離滅裂であつてはならない。正直であり、冗の無いものでなければならぬ。虚飾を避け、主を取つて動かぬものでなければならぬ。品を持すること高くして、しかも謙虚なる心に徹したものでなければならぬ。人格の統一をさながらにして流れるものでなければならぬ。またそれを收めるものでなければならぬ。

文藝の鑑賞

文藝的作品につき、我々は一體それの何を鑑賞するのであるか。或人は其の作品の語る一つの物語に興味を持つかも知れない。例へば家庭小説について其の事件の進行に特別の興味を持つたり、私小説に於いて小説家の私行を知る事に一種の愉悦を味はつたりするのはそれである。文藝の鑑賞としてそれはまだ

少しも獨立した態度だとは言へない。此の仕方は、武者繪を見て其の戰爭の内容に興味を持つと同じ程度にある。また或人は、其の作品の提起した一つの問題に大いに心を惹かれるであらう。文藝の鑑賞としてこれも亦十分に至つたものとは言ふ事が出來ない。單に抽象的に問題とそれの解決とを知らうと思へば、我々は必ずしも文藝的作品に頼るを要しない。文藝的作品の眞の鑑賞は、其の作品の描寫自身を悦ぶものでなければならぬ。更に進んでは其の描寫の文章自身を樂しむものでなければならぬ。藝術の藝術たる所以は、たゞ其の描寫に、文章に、存するが故である。かく言つても、私の所謂描寫は單に形式的平面的のものでは無い。それは立體的に深く築かれたものだ。汲めども盡きない無限の生活の源泉を背景に擔つて、それの動

く尖端となつたものだ。一片の結晶の中に全人生を象徴せしめたものだ。それだから此の描寫に、文章に、悅を見出すといつた場合、それは更に此の形式に浸る悅を通して其の奥に動く人生に浸る悅を經驗することを意味する。此處に至つて問題に心を惹かれることも生きて來る。事件の內容に興味を持つことも生きて來る。いや其の最後のことは近代の文藝にあつて殊に輕視せられてはならない事だ。文藝により我々は人生の眞實に、更に社會の實相に氣附かされるからである。なほ進んで我々は其の作品のすべてを通し、作者自身の人格に觸れ、其の高い氣品に打たれることが出來る。それにより我々の生活も亦豐かに擴大せられる。人生の理想に氣附く事も出來る。併し結局文藝の鑑賞とは、それにより我々がヒュマニティイを知

ヒュマニティイ Humanity

近江の荒都　天智天皇の都された近江の大津宮の舊址　滋賀縣近江國滋賀郡滋賀村滋賀里崇福寺の地が內裏のあつた處といふ

大津市の北四粁

柿本人麿　藤原朝時代の歌聖　持統文武兩帝ごろの人

奈良山　奈良市の西北にある山　歌姫越

り、すべての人間の進む道を許す境界に達する事だ。（文學論）

二　寧樂の匂

近江の荒都を過ぐる時よめる歌　柿本人麿

玉襷　畝傍の山の　橿原の　ひじりの御代ゆ　生れまし　神のことゝ　樛の木の　いやつぎ〳〵に　天の下　知ろしめしゝを　天にみつ　大和をおきて　あをによし　奈良山をこえ　いかさまに　思ほしめせか　天ざかる　鄙にはあれど　いはゞしの　近江の國の　さゝなみの　大津の宮に　天の下　知ろしめしけむ　すめろぎの　神のみことの　大宮は　こゝと聞けども　大殿は　こゝと言へども　春草の茂く生ひたる　霞

立つ　春日の霧れる　もゝしきの　大宮處　見ればかなしも

反歌

さゝなみの滋賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちかねつ

辛崎
滋賀の都の琵琶湖に臨めるところ

さゝなみの滋賀のおほわだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも

山部赤人
奈良時代の歌聖
聖武帝に仕へた

富士山を望みて　山部赤人

天地の　わかれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　渡る日の　影も隠ろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　いゆきはゞかり　時じくぞ　雪は降りける　語り継ぎ

言継ぎ行かむ　富士の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士のたかねに雪は降りける

山上憶良
藤原奈良時代の歌人
遣唐使の隨員
筑前守
天平五年（一三九三）卒
年七十四

思子等歌　山上憶良

釋迦如來金口正説。等思衆生如羅睺羅。又説愛無過子。至極大聖尚有愛子之心。況乎世間蒼生誰不愛子乎。

等思衆生
吾觀衆生無偏黨如羅怙羅。（最勝王經）

羅睺羅
釋迦の子
十大弟子の一人
Rahula

宇利波米娑　胡藤母意母保由　久利波米娑　麻斯提斯
農波由　伊豆久欲利　枳多利斯物能曾　麻奈迦比爾
母等奈可々利提　夜周伊斯奈佐農

反歌

銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米夜母

喩族歌

大伴家持

出雲守大伴古慈悲が淡海三船の讒言によつて免官された時家持が大伴氏の一族に喩した歌

大伴家持

奈良朝の歌人

旅人の子

延暦四年（一四四五）卒

ひさかたの　天の門開き　高千穂の　岳に天降りし
皇祖の　神の御代より　櫨弓を　手握り持たし　眞鹿
兒矢を　手挾み添へて　大久米の　ますら健男を　先
に立て　靫取負ほせ　山川を　岩根さくみて　履みと
ほり　國覓ぎしつゝ　ちはやぶる　神をことむけ　ま
つろはぬ　人をもやはし　掃き淨め　仕へ奉りて　秋
津洲　大和の國の　橿原の　畝傍の宮に　宮柱　太知

り立てゝ　天の下　知らしめしける　皇祖の　天の日
繼と　つぎて來る　君の御代々々　隱さはぬ　明き心
を　皇方に　極めつくして　仕へ來る　祖の司と　言
立てゝ　授け給へる　生みの子の　いやつぎ〳〵に
見る人の　語りつぎて　聞く人の　鑑にせむと　あた
らしき　淨きその名ぞ　おほろかに　心思ひて　虛
言も　祖の名斷つな　大伴の　氏と名に負へる　ます
らをの伴

反歌

劍太刀いよ〳〵とぐべしいにしへゆさやけく負ひて來
にしその名ぞ

澄の江　京都府丹後國竹野郡網野町にあるといふ

水江浦島子を詠める　讀人不知

春の日の　霞める時に　澄の江の　岸に出で居て　釣船の　とをらふ見れば　いにしへの　事ぞ思ほゆる
水の江の　浦島の子が　鰹釣り　鯛釣りほこり　七日まで　家にも來ずて　海坂を　過ぎて漕ぎゆくに
たつみの　神の處女に　たまさかに　い漕ぎ向ひ　相語らひ　事成りしかば　かき結び　常世に至り　わた
つみの　神の宮の　内の邊の　妙なる殿に　携はり　二人入り居て　老いもせず　死にもせずして　永き世
に　ありけるものを　世の中の　愚人の　吾妹子に　告りて語らく　「須臾は　家に歸りて　父母に　言をも
告らひ　明日のごと　吾は來なむ」と　言ひければ　妹

が言へらく　「常世邊に　また歸り來て　今の如　逢はむとならば　此の櫛笥　開くなゆめ」と　そこらくに
固めしことを　澄の江に　歸り來りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　怪しみと　其
處に思はく　「家ゆ　出でて　三年の程に　垣もなく　家失せめやも　此の筥を　開きて見れば　もとの如
家はあらむ」と　玉櫛笥　少し開くに　白雲の　筥より　出でて　常世邊に　たなびきぬれば　立ち走り　叫び
袖振り　臥いまろび　足摺りしつゝ　たちまちに　心　けうせぬ　若かりし　肌も皺みぬ　黑かりし　髮も白
けぬ　ゆり〳〵は　息さへ絶えて　のちつひに　いの　ち死にける　水の江の　浦島の子が　家どころ見ゆ

反歌

常世邊に住むべきものを劍太刀しが心からおぞや此の君

有間皇子自傷結松枝歌二首

家有者笥飯乎草枕旅爾之有者椎之葉

元暦校本萬葉集

筆蹟

有間皇子自傷

結松枝歌二首

家有者笥爾盛飯乎草枕旅爾之有者椎之葉爾盛

いへにあればけにもるいひをくさまくらたびにしあればしひのはにもる

志貴皇子

歌人

天智天皇の皇子

靈龜二年(一三七六)薨

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりにける

志貴皇子

輕皇子

天武天皇の孫

草壁皇子の子

安騎野

奈良縣宇陀郡

高市黑人

藤原時代の歌人

かな

輕皇子安騎野に宿し給ふ時よめる歌

柿本人麿

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ

高市黑人

いづくにか舟はてすらむ安禮の崎漕ぎたみ行きし棚無し小舟

大唐に在る時本郷を憶ひてよめる歌

山上憶良

いざ子どもはやも日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ

楸 ひさかきともいふ楊桐科の常綠樹

芳野離宮 奈良縣吉野郡中莊村宮瀧にあつたといふ

勅 聖武天皇の

象の小川 奈良縣吉野郡中莊村宮瀧にある象山より出て吉野川に入る小川

布勢水海 富山縣越中國氷見郡氷見町にある十二町潟今は干拓されて小さくなつた

多祜灣 氷見町の南四粁田子もとは布勢水海がこゝまでつゞいてゐた

ぬばたまの夜の更けぬれば楸生ふる清き河原に千鳥しば啼く　山部赤人

暮春の月、芳野離宮に幸せる時勅を奉りて　大伴旅人

むかし見し象の小川を今見ればいよゝ清けくなりにけるかも

布勢水海に遊覽し、船を多祜灣に泊めて、藤の花を望み見て　大伴家持

藤浪の影なる海の底清みしづく石をも玉とぞ吾が見る

興に依りて詠める歌　大伴家持

わが宿のいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

天平五年 聖武天皇の御世（一三九三）

元興寺 もと蘇我馬子が大和國高市郡飛鳥に立てた寺で法興寺ともいつた今の飛鳥大佛の地奈良朝になつて奈良の左京に移り新元興寺といふ

この歌は天平十年（一三九八）の歌

天平五年遣唐使の船、難波を發ちて海に入る時、母の子に贈れる歌　讀人不知

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子はぐくめ天の鶴群

防人歌　有度部牛麿

水鳥のたちのいそぎに父母に物言はず來にて今ぞくやしき

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは　今奉部與曾布

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知れらば知らずともよし（萬葉集）　元興寺の僧

三　歌の調子

島木赤彦
歌人
教育者
本名久保田俊彦
明治九年長野縣
上諏訪町生
大正十五年歿
年五十一

短歌に於ける表現は、單に歌の言語の持つ意味のみで足れりとすることは出來ません。その表現しようとする感動の調子が、歌の各言語の響や、それらの響をつらねた全體の節奏の上に現れて、始めて歌の生命が生まれるのであります。歌の言語の響・節奏、これを歌の調(しらべ)・調子若しくは聲調・格調等と謂ひます。

我々の感動は、伸び〳〵と働く場合、ゆる〳〵と働く場合、切迫して働く場合、沈潛して働く場合といふやうに、個々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が、さながらに歌の言語の響や全體の節奏に現れて、始めて表現上の要求が充たされるのであります。この調子の現れは、意味の現れと相軒輊するところないほど、短歌表現上の重要な要求になるのでありまして、古來よりの秀作は、皆歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐるために、永久の生命を持つてゐるのであります。例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月(ゆづき)が嶽に雲立ちわたる　(萬葉集卷七)

の歌について言ひましても、「山川の瀬の鳴るなべに」と一氣に進んで第四句を呼び起すところに、多く生動の趣があるのでありまして、この「なべに」といふ濁音を含んだ第三句が、第四句二箇の濁音と相俟つて山川の景情を生動させてゐる勢は、これを他の如何なる句法を以てしても言換へることの出來ないものであります。これは勿論「なべに」の持つ意味より來る力もあるの

柿本人麿歌集
萬葉集に引用せられた歌集
滅びて傳はらない

弓月が嶽
奈良縣磯城郡纒向村にある山
三輪山の近く

であります、響から來る力と、その響の全體の節奏に及す影響とが大きいのであります。殊に、第一二句豆爾波「の」の疊用を受けて、「鳴るなべに」と押し進んでゆく勢を想ふべきであります。第四五句は、これに對して更に非常の力を以て据つてゐるのでありまして、金剛力を以て前句を受け且結んでゐるといふ概があります。この力も主として調子の上に現れてゐるのでありまして、第五句二五音が、主として力の中心となつて居ります。試みに、第五句を「雲ぞ立つなる」「白雲立つも」などの三四音四三音としたら、どうでありませう。歌の力がめちゃ〳〵に碎けてしまふでありませう。歌の生命が內容や材料よりは、調子にあることが分ります。この歌、實に、山河自然の景物に對して作者の心中に動いた寂寥感が徹底して歌の調子に現れてゐるのであ

りまして、かやうな歌によつて歌の調子を會得することはためになることであります。

み吉野の象山のまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲かも　（萬葉集卷六）

これは山部赤人の歌であります。「山のま」は「山の際」、「木ぬれ」は「木の末」、「こゝだ」は「許多」の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「あしびきの山川の瀨の」の歌によく肖てゐるのみならず、「み吉野の象山のまの」と豆爾波「の」を疊用して初句を起してゐる手法までも、よく肖て居るのでありますが、第三句以下にいたつて、全く前者と異なる感動をあらはして居ります。これは前の人麿の歌の、第四句に至つて突然山の名を提示し來つた勢に比して、「み吉野の象山のまの木ぬれには」と

呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押し進めてゐるからでありまして、「こゝだもさわぐ鳥の聲かも」四三音三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」の七音二五音の諧調と、自ら別趣の勢をなして居ります。人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つて居ります。赤人のこの歌は、赤人の沈潛した靜肅な性格に徹して同じく人生の寂寥所に入つて居ります。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は、個性の異なるがまゝにちがつてゐるのでありまして、それが自然に歌の調子に現れるのであります。人麿の歌は、數歩を過れば騷がしくなりませう。赤人の歌は、數歩を過れば平板になりませう。これは皆兩者の歌の調子から來てゐる相違でありまして、調子の相違は兩者性格の相違から來てゐること勿論であります。猶この赤人の歌で、上句を受ける第四五句に重々しい響きを持つた詞の多いといふことが、讀者の感動を異常な所へ誘つて行く力になつてゐることに注意すべきであらうと思ひます。

春すぎて夏きたるらし白妙のころもほしたり天の香具山　（萬葉集卷一）

持統天皇の御歌として知られて居ります。第二句と第四句で切れてゐるために、調子が落着いて、初夏の心持が現れて居ります。第五句の名詞止めも、この場合よくすわつて、動かせない重みを持つて居ります。秀作であると思ひます。歌の命は、大抵第五句で定まります。第五句だけでは無論定まりませんが、少くとも第五句の調子が輕ければ、歌全體を輕くしてしまふやう

であります。これは、前に擧げた例について見ても分ります。萬葉集には、字餘りの句が多いのでありますが、それは、大抵第五句にあるやうでありますす。それも第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

（萬葉集卷三）

夏實の川　吉野川の上流いま宮瀧の上手に栞摘村がある

湯原王　天智天皇の皇孫施基皇子の子光仁天皇の皇弟

湯原王の御歌であります。第一句からすら〳〵と連續した句法を第四句で一旦踏切つてゐるために緊（しま）りと勢が生じ、さらに「山かげにして」といふ生動の句を据ゑて、この句一首全體に反響するほどの力になつて居ります。感嘆に値する作でありませう。

以上の例は、皆萬葉集から擧げました。今一つ、源實朝の歌を擧げます。

大海の磯もとゞろに寄する波割れて碎けて裂けて散るかも　（金槐集）

波の韡韡と寄せかへす景情に對して、割れてといひ、碎けてと重ね、裂けてと疊んで、その重疊の勢を「かも」といふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本、第三句「よる波の」とありますが、これは、必ず「よする波」と一旦踏切らねば歌の勢を成さぬのであります。波の姿と、感動の姿と、そしてそれを現した歌の姿と、如何によく一致して居るかを知ることが出來ませう。

以上諸例によつて、少しく歌の調子を說きましたが、心の相が人人に異なり、一人の心も樣々に動くのでありますから、その動きの狀が、如何にして歌の調子に現れるかといふことは、到底說き

武田祐吉
國文學者
國學院大學教授
明治十九年東京生

盡くせる筈がありません。只、それが如何なる心の動きであらうとも調子の上に緊張して現れて居らねばならぬことは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔きものは柔きに緊張して居り、強きものは強きに緊張して居り、暢やかなるは暢やかなるに緊張して居らねばなりません。而してその緊張の快適は萬葉調と唱へてゐるのであります。左様な歌の調子を我々觀から生れることは贅言に及びません。（歌道小見）緊張の調子が緊張の主

四　素戔嗚尊

武田祐吉

伊弉諾尊の生まれた三貴子のうちで、月讀尊は小量の神話を有するだけで、あまり主要なる働を爲さない。他の二神に關して、

記紀
古事記
日本書紀
古語拾遺
齋部廣成の撰
大同二年（一四六七）に成る

大祓
延喜式祝詞にあるもの
六月及び十二月の大祓

一場の說話がある。この說話は記紀の外に古語拾遺にも詳しい記事がある。

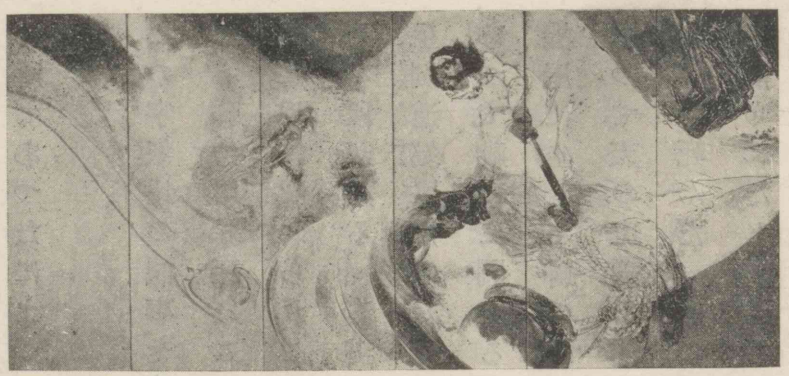
天照大神の光明に滿ちたる神格に對して、素戔嗚尊の暴勇を配したのは、この說話をして波瀾を起さしめ、曲折を來す因緣である。この說話は天磐戸の段を中心として前中後の三部に分つことが出來る。

素戔嗚尊は父の神の詔命に從はない。この故に根の國へと逐はれたので、その暇乞に高天の原に來る。この國での存在に適しないものを、天神の命に依つて根の國へ逐ふといふ構造は大祓の詞に見えるところである。

素戔嗚尊が高天の原に上り來る狀が凄まじいので、天照大神は、その意を忖度して、必ず善き心でないであらうとて、武裝して待

ち、その上つて來た次第を問はれる。素戔嗚尊は心の清く明かなることを證せんが爲に、共に宇氣比を爲して子を生まんことを請ひ、天の安の河を中に置いて宇氣比をする。天照大神まづ、素戔嗚尊の佩べる十握の劍を取つて三段に打折つて、天の眞名井に振滌ぎて、さ嚙みに嚙んで吹棄つる氣吹の狹霧のうちに三柱の女神を生まれる。次に素戔嗚尊、天照大神の纏ける八尺の勾玉の五百津の御統（みすまる）の玉を取つて五柱の男神を生む。この三女神は筑紫の宗像に鎭座する神であつて、この說話はこゝに神社鎭座の本緣に交涉を保つてゐる。

宇氣比といふのは、必ずかくあるべしと期する心の表出である。古事記の垂仁天皇の段に鷺を宇氣比落し、また宇氣比活かし、白檮を宇氣比枯し、また宇氣比生かした記事を始めとして、古書に



素戔嗚尊（川村清雄筆）

よりより見える所である。

さきに伊弉諾尊によつて、禊の敍述をなしたのを受けて、こゝに宇氣比の典型敍述をなしたかの觀がある。神事に關する各種の現象を網羅しようとの企から、後の天磐戸の段が祭の典型的記事なるを始めとし、禊・宇氣比等の各種の記事があるのであらう。この段の宇氣比の記事のうち、天の眞名井に臨んでこれをなしたこと、劍と玉とを材料としたことが注意される。さて、素戔嗚尊の劍によつて成れる神が

女神であつたによつて、淨き心の表出せられたものと爲してゐる。

この宇氣比の記事を序とし、素戔嗚尊はその宇氣比に勝つたので、心驕つて暴惡なことをなすので、天照大神はこれを憤つて天の磐戸に隱れられ、こゝにこの說話の中心をなすところの天磐戸の段が始る。素戔嗚尊の罪惡として、毀畔・埋溝・放樋・重播・刺串・生剝・逆剝・屎戸の八つが數へられる。これらの罪惡は天の罪であつて、神事に關する罪惡となされてゐる。中にも天照大神が機屋に坐して神の御衣を織らしめられる時に、その家の屋根を穿つて天の斑駒を逆剝に剝いで落し入れたので、天の衣織女が驚いて死んだ。これによつて天照大神が見畏れて天磐戸にさし籠られたといふのが古事記の記事である。

岩戸割る
萬葉集卷三河內王を葬る時手持女王の作

書紀の本文には天照大神自身が梭を以て御身を傷つけられたとあり、その第二の一書では、素戔嗚尊の屎戸の惡行によつて天照大神が病を得られたと記してゐる故に、天照大神の天磐戸に籠られたのを、その逝去と爲す說も存するのである。死して墓門を閉づるを磐戸を隔つと解することは、萬葉集に、死せる夫を悼んだ「岩戸割る手力もがもた弱き女にしあればすべの知らなく」といふ歌も存してゐる。

天照大神が天磐戸に隱れられた爲に、高天原葦原中國悉く暗黑となつて萬妖皆發つた。依つて、八百萬の神が天安河原に集つてその對策を議した。そして思兼神の謀によつて、天磐戸の前に於てなさるべき事が決せられる。天磐戸の前においてなされた事を古事記によつて敍すれば、常

世の長鳴鳥を集めて鳴かしめ、石凝姥命をして鏡を、玉祖命をして玉を作らしめ、天兒屋根命・太玉命をして鹿の肩骨を燒いて太占をなさしめて、天香山の榊を根こじにこじて、上つ枝に珠を懸け、中つ枝に鏡を懸け、下つ枝に白和幣・青和幣を懸け、これを太玉命が捧げ持ち、天兒屋根の命が、太詔戸を申し、天の手力男神が戸の脇に隠れた。さて天鈿女神が日影の蔓を手次にかけ、眞拆の蔓を鬘とし、小竹葉を手草とし、桶伏せ踏み轟かして、神懸りして胸乳を搔き出し、裳の緒を垂れて舞つたので、八百萬の神が共に笑ひ、高天の原に鳴り響いた。

祭の準備として、太占によつて、時日や祭に仕へる者を選定するのは常である。榊の枝に鏡や玉を懸けることは、天降る神を、迎へる意味のものである。書紀の仲哀天皇の條に、筑紫の伊覩縣主の祖、五十迹手といふもの、天皇の行幸を聞きて、五百枝の榊を拔取つて、船の舳艫に立て、上つ枝に八尺瓊を懸け、中つ枝に白銅の鏡を懸け、下つ枝に十握の劍を懸けて迎へたことを始め、折々同種の記事が見える。これ天皇を神に擬して迎へる意であつて、祭の主體である。これを圍んで歌舞する所以は、そのうちの一人が神懸りの情態になつて神話を發するので、天磐戸の段に於ては鈿女命がこれに當る。

伊覩　筑前國怡土郡怡土村　今の福岡縣糸島郡深江村

五十迹手　新羅の歸化人天日槍の後裔といふ

天神を招いて神語を聞くのは、以て妖氣を拂ふ所である。もし天磐戸を葬の禮と解するならば、死者を生じたことの穢れを拂はんとするにあらう。天鈿女命が手草を持ち、蔓を懸けることも神を託けようとする用意である。

天照大神は、萬神の笑ふのを怪しんで、内より戸を聞かれた時に、

天の手力男神は御手を取りて引出し奉り、太玉命はその後に標繩を張渡した。これによつて、天地はふたゝび明るくなつた。

この記事もまた祭の典型の一部として解することが出來る。それは、祭は常に夜に入りてなすのである。祭が終らうとするに當つて、夜は明け、日は東に上る。その事の擬人的説明と解することも出來るのである。

天磐戸の段は、説話としてはその敍述の精細にして著しく神祕的なる點に興味がある。天地は常夜の暗黑である。閉された天磐戸の前で、雞を集め、鏡や玉や和幣を懸けた榊を立て、天鈿女が立つて舞ふのだ。その酣なるに及んで、日神ふたたび磐戸を出でられて、天地が清明になる。古語拾遺に、群神がこの時、手を伸して歌舞し、相共に稱へて、

あはれ　あな面白　あな樂し　あなさやけ　おけ

と歌つたといふのは、その愉快の狀を表白してゐるものである。伊弉諾尊の黃泉訪問の暗黑的なると對して、これは明るい一場の劇的構成である。

天磐戸の段の後紀として、素戔嗚尊の處分と、これに伴なふ尊の流浪とが始る。八百萬の神が謀つて、素戔嗚尊に千座の置戸を課し、鬚や手足の爪を切つて祓へしめゝ逐拂つた。祓はまた神事現象の一つである。

説話はこゝに局面を轉ずる。逐はれたる素戔嗚尊は辛苦しつつ天降る。さて出雲の國簸川上に降つて、その地の人の爲に八岐の大蛇を退治し、處女奇稻田姫を獲て須賀の宮を作つてこれに籠る。かの大國主命はこの素戔嗚尊の子孫である。

簸川　源を三國山に發し宍道湖に注ぐ

須賀宮　島根縣出雲國大原郡海潮にある

素戔嗚尊が八岐の大蛇を退治た時に、その尾を斬つて天の叢雲劍を得た。この劍は後にかの天磐戸の段に於て榊の枝に懸けたところの鏡及び玉と共に三種の神器として皇孫に傳へられた。天叢雲劍は、後に日本武尊が東征に携へて、賊の火を放つた原野を薙立てられたので、草薙劍とも呼ばれる。この八岐の大蛇退治の說話は、すなはち寶劍傳說の一であつて、三種の神器の他の二つであるところの鏡や玉の說明の次にこれを載せて、三種の神器の由來の說明を定成し、以て天孫降臨の伏線を爲してゐるのである。

天照大神と素戔嗚尊との說話は、その出生よりして寶劍の出現に終るまで、女神の明麗と男神の武勇とを對することによつて主調を爲し、終始劇的分子に富んでゐる說話である。神話の全

八雲立つ
八雲たつ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を

體に對しては主要なる前行說話であつて、字氣比によつて生まれた男神の一が後に降臨を爲す天孫の父に當り、また三種神器の由來を說いてゐる點に於いて後段との照應を忘れない。八岐の大蛇退治の話は、全體としては、逐はれたる神の記事であつて、劍の出現を語り、次に出る大國主命の話への連絡を保つてはゐるが、畢竟は傍系であらう。素戔嗚尊の奇稻田姫を得るに至る武勇譚、及び姫を得て「八雲立つ」の神詠をなす點は、一の纏つた小篇說話をなしてゐる。天孫降臨への主脈說話に對して、或は別系の傳來に係るものと考へられる。須賀の宮に鎭ることを敍してゐるのは、また一の神座鎭座本緣の說話にもとづくものであらう。(神と神を祭る者との文學)

五　天石屋戸

この時伊邪那岐命、いたく歡ばして、詔りたまはく、「あれは御子生み生みて生みの終に、三柱の貴の御子を得たり。」と詔りたまひて、卽ちその御頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は、高天の原を知らせ。」と事依さして賜ひき。　次に月讀命に詔りたまはく、「汝が命は、夜の食國を知らせ。」と事依さしたまひき。　次に建速須佐之男命に詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ。」と事依さしたまひき。

頸珠　玉を緒に貫いて頸にかけるもの

かれおのもゝ依さしたまへる命のまに〳〵知ろしめす中に、速須佐之男命依さしたまへる國を知らさずて、八拳鬚、心前に至るまで啼きいさちき。　その泣きたまふさまは、青山を枯山なす泣枯らし、海河はことゞ〳〵に泣乾しき。　こゝをもて、荒ぶる神の音、狹蠅なす皆わき、萬づの妖、ことゞ〳〵におこりき。　かれ伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまはく、何とかも汝は事依させる國を知らさずて、哭きいさちる。」と詔りたまへば、申したまはく、「あは、妣の國、根の堅洲國に罷らむとおもふが故に哭く。」と申したまひき。　こゝに、伊邪那岐大御神、いたく怒らして、「然らば、汝は此の國にはな住みそ。」と詔り給ひて、乃ち神やらひにやらひ給ひき。　かれ伊邪那岐大御神は淡海の多賀になもまします。

根の堅洲國　黃泉の國

多賀　近江國犬上郡多賀村官幣大社多賀神社

かれこゝに、速須佐之男命申したまはく、「然らば天照大御神にまをして罷りなむ。」と申したまひて、乃ち天に參上ります時に、山川ことゞ〳〵に動み、國土皆搖りき。　こゝに天照大御神聞き驚かして、「あがなせの命の、上り來ますゆゑは、必ずうるはしき心ならじ、あが國を奪はむとおもほすにこそ。」とのり給ひて、卽ち御髮を解

なせ　男子を親しんでいふ語

みづら　上代の男子の髪の結び方　髪を頭の中央で左右へ分けて耳の處で縮ねて眞中を緒で結んで垂れるもの　後にはびんづらといふ

須麻流　統の意で緒を貫くこと

千入　千箟入

靫　矢を盛つて背に負ふ具

鞆　弓を射るとき左の臂につける半月形の皮具

き、御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御髻にも、左右の御手にも、みな八尺の勾璁の五百津の美須麻流の珠をまきもたして、背には千入の靫を負ひ、五百入の靫をつけ、また臂に稜威の高鞆をおばして、弓腹ふりたてゝ、堅庭は向股に蹈みなづみ、沫雪なす蹴ゑ散かして、伊都の男建び蹈み建びて、待ち問ひたまはく、「なぜ上りきませる。」と問ひ給ひき。こゝに速須佐之男命申したまはく、「あは邪き心なし。唯大御神の命もちて、あが哭きいさちることを問ひたまひし故に、申しつらく、『あは妣の國にまからむと思ひて哭く。』と申しゝかば、大御神『汝は此の國にはな住みそ。』と詔りたまひて、神やらひやらひたまふ故に、罷りなむとするさまを申さむと思ひてこそまゐ上りつれ。けしき心なし。」と申したまへば天照大御神、「然らば、汝の心の清明きことは如何にして知らまし。」とのりたまひき。

うけひ　誓ひ

天の安河　高天原にある河

天の岩戸（芳年筆）

こゝに速須佐之男命、「おのも〳〵うけひて、御子生まな。」と申したまひき。かれ爾に、おのも〳〵天の安河を中におきて、うけふ時に、天照大御神まづ建速須佐之男命の佩かせる十拳の劍を乞ひわたして、三段にうち折りて、ぬなとももゆらに、天の眞名井に振り滌ぎて、さがみにかみて吹き棄つる氣吹の狹霧になりませる神の御名は、多紀理毘賣命、又の御名は奥津島比賣命とまをす。つぎに市寸島比賣命、またの御名は、狹依毘賣

命とまをす。次に多岐都比賣命。速須佐之男命、天照大御神の左のみゝづらに纏かせる八尺の勾璁この五百津のみすまるの珠を乞ひわたして、ぬなともゆらに、天の眞名井にふり滌ぎてさがみにかみて吹きうつる氣吹の狹霧に、なりませる神の御名は正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。また右のみゝづらに纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狹霧になりませる神の御名は、天之菩卑能命。また御かづらに纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狹霧になりませる神の御名は、天津日子根命。又左の御手に纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狹霧になりませる神の御名は、活津日子根命。また右の御手にまかせる珠を乞ひわたしてさがみにかみて、吹きうつる氣吹の狹霧にな

りませる神の御名は、熊野久須毘命。こゝに天照御大神速須佐之男命にのりたまはく、「この後にあれませる五柱の男子は、物實あがものによりてなりませり。かれおのづから吾が御子なり。さきにあれませる三柱の女子は、物實汝のものによりてなりませり。かれ乃ち汝の御子なり」。かく詔り別けたまひき。こゝに速須佐之男命天照大御神に白したまはく、「あが心清明き故に、あが生める御子、手弱女を得つ。これによりて申さば、おのづから吾勝ちぬ」といひて、勝ちさびに、天照大御神の、御營田の畔放ち、溝埋め、またその大嘗きこしめす殿に、屎まり散らしき。かれしかすれども、天照大御神は、咎めずてのりたまはく、「屎なすは醉ひて吐きちらすとこそ、あがなせの命、かくしつらめ。又田の畔放ち、溝埋むるは、地をあたらしとこそ、あがなせの命、かくしつ

忌屋服
神に獻る衣を織る清淨な御殿

高御產巢日神
高天原に始めて生れ出でた三柱の神の一

思兼神
多くの人の思慮を一人で兼ね有つほど智慧のある神

長鳴鳥
雞

らめ」と詔り直したまへども、猶その惡しき態止まずてうたてあり。天照大御神、忌服屋にまし〳〵て、神御衣織らしめたまふ時に、その服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墜し入るゝときに、天衣織女見驚きて、みうせにき。かれこゝに天照大神神見畏みて、天の石屋戸を閉てゝ、さしこもりまし〳〵き。すなはち高天原皆暗く、葦原中國ことゞに闇し。これによりて、常夜ゆく。こゝに萬づの神のおとなひは、狹蠅なす皆わき、萬づの妖ことゞにおこりき。

こゝをもて、八百萬の神、天安之河原に神集ひ集ひて、高御產巢日神の御子、思兼神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集へて、鳴かしめて、天の安河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛人天津麻羅をまぎて、伊斯許理度賣命におほせて、鏡を作らしめ、

天の香山
高天原にある山それが後に二つに分れて伊豫と大和に落ちて來たといふ

和幣
ゆふともいふ楮や麻の纖維で織つた布

日蔭
日蔭のかづら
まさき
正木のかづらつるまさき

玉祖命におほせて、八尺の勾璁の五百津の御須麻流の珠をつくらしめて、天兒屋命・布刀玉命をよびて、天の香山の眞男鹿の肩をうつぬきに拔きて、天の香山の天のはゝかを取りて、うらへまかなはしめて、天の香山の五百津眞賢木をねこじにこじて、上枝に、八尺の勾璁の五百津のみすまるの玉を取りつけ、中枝に八尺鏡をとりかけ、下枝に白和幣・青和幣をとり垂でて、このくさ〴〵、のものは、布刀玉命、太御幣と取りもたして、天兒屋命、太祝詞言ねぎ申して、天手力男神、御戸のわきに隱り立たして、天宇受賣命、天の香山の天の日蔭をたすきにかけて、天のまさきを鬘として、天の香山の小竹葉を手草にゆひて、天の石屋戸に、うけ伏せて、蹈みとどろこし、神がかりして、胸乳をかきいで、裳紐をおしたれき。かれ高天の原ゆすりて、八百萬の神共に笑ひき。

こゝに天照大御神、怪しとおもほして、天の石屋戸を、ほそめに開きて、内よりのり給へるは「吾がこもりますによりて、天の原おのづから闇く、葦原中國も、皆闇けむとおもふを、などて天宇受賣はあそびし、また八百萬の神もろ〳〵わらふぞ」とのり給ひき。乃ち天宇受賣、「なが命にまさりて貴き神いますが故に、ゑらぎあそぶ」と白しき。かくまをす間に、天兒屋命・布刀玉命かの鏡をさしいでて、天照大御神に見せまつる時に、天照大御神、いよゝあやしとおもほして、稍戸よりいでて臨みます時に、かの隱り立てる天手力男神、その御手を取りて、引き出しまつりき。乃ち布刀玉命、尻久米繩をその御後方にひきわたして、「こゝよりうちになゐ還り入りましそ」と白しき。かれ天照大御神、出でませる時に、高天の原も、葦原中國もおのづから照りあかりき。こゝに八百萬の神

尻久米繩　注連繩

共に議りて、速須佐之男命に、千位置戸を負せ、また鬚を切り、手足の爪をも拔かしめて神やらひやらひき。（古事記）

千位置戸　千座にのせた澤山な贖罪の品

六　忍坂の大室屋

神武天皇

忍坂の　大室屋に　人多に　來入り居り　人多に　入り居りとも　みづ〳〵し　久米の子が　頭槌い　石槌い持ち　擊ちてし止まむ　みづ〳〵し　久米の子等が頭槌い　石槌い持ち　今擊たばよらし（古事記）

日本武尊

新治　筑波を過ぎて　幾夜か寢つる

火燒の翁

忍坂　大和國磯城郡城島村忍坂に土蜘蛛を擊たれるとき合圖によまれた御製

久米の子　道臣命の率ゐた久米部の兵士たち

新治　筑波　共に常陸國の地名

日々なべて　夜には九夜　日には十日を（古事記）　日本武尊

尾張に　直に向へる　尾津の埼なる　一つ松　吾兄を
一つ松　人にありせば　太刀佩けましを　衣着せまし
を　一つ松　吾兄を（古事記）

尾津の埼　伊勢國桑名郡尾津郷今の長島の邊

思國歌　日本武尊

大和は　國の眞ほろば　たゝなづく　青垣山ごもれる
大和し　うるはし

平群の山　今の大和國葛城郡の内

命の　またけむ人は　たゝみごも　平群の山の　熊樗
が葉を　髻華に挿せ　その子
はしけやし　我家の方よ　雲ゐ立ち來も（古事記）

大葉子　調吉士伊企儺の妻　大葉子

韓國の　城の上に立ちて　大葉子は　領巾振らすも
日本へ向きて（日本書紀）　雄略天皇

三吉野の　小室が嶽に　猪伏すと　誰ぞ　大前に申す
やすみしゝ　我が大君は　猪待つと　吳床にいまし
白たへの　袖着具ふ　手腓に　虻搔着き　その虻を
蜻蛉　早咋ひ　かくの如　名に負はむと　そらみつ
大和の國を　蜻蛉島とふ（古事記）

しなてる　片岡山に　飯に飢て　こやせる　その旅人
あはれ　親なしに　汝成りけめや　さす竹の　君はや
無き　飯に飢て　こやせる　その旅人　あはれ（日本書紀）　聖德太子

海行かば　水づく屍　山行かば　草むす屍　大君の
へにこそ死なめ　のどには死なじ　（續日本紀）

讀人不知

海行かば
聖武天皇の宣命の中に見えた古歌で大伴佐伯兩氏の先祖の歌つたものといふ

藤岡作太郎
國文學者
東京帝國大學文科大學助教授
文學博士
石川縣金澤生
明治四十三年歿
年四十一

七　上古の詩歌

藤岡作太郎

祝詞は普通散文として取扱はるといへども、その用神意を悅ばすにあり、一種の諧音を有せしめて、壇前に朗讀せるものなれば、一に節調を主とす。この意味に於て和歌と距ること甚だ遠からず、たゞかれが備へたる如き律格を缺くのみ、卽ちこれを散文詩と呼ぶ最も當れり。されば祝詞の長所は聲調の整へるにあり、聲調の美にして、思想の比較的に見るべきものなきは、上古文學を通じたる性質なりといへども、祝詞に於て殊に然りとす。

その內容の長所をいへば、秋毫の包むなく、欺くなく、飾るなくして、天眞のまゝに感情の流露せることなるべし。されどさすがにこれも時代の產物なり、その神々に向ひて告ぐるにも、しかじかの供物を捧ぐるが故に、願はくは風雨時を違へざれ、年は豐かに、疫病の禍することなからんことをといへるなど、餘りに幼稚なりといはざるを得ず。行文また變化に乏しく、千篇一律の嫌なきにあらずといへども、譬喩の壯大にして氣魄の雄渾なるは、後世よくこれに及ぶものなし。祈年祭の詞に、

天の壁たつきはみ、國の退きたつかぎり、青雲のたなびくきはみ、白雲のおり居、向伏すかぎり、青海原は棹楫ほさず、舟の舳の至り留るきはみ、大海原に舟みちつゞけて、陸よりゆく道は、荷の緒ゆひかためて、磐根・木根ふみさくみて、馬の爪の至り留る

かぎり、長道間なくたちつゞけて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱うちかけて引きよすることのごとく……

といひ、また大祓の詞に、

科戸の風の天の八重雲を吹放つことの如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風・夕風の吹拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳とき放ち、艫とき放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が下を燒鎌の敏鎌もて打拂ふことの如く……

といへるが如き、以てその一斑を窺ふべし。これらの例に見るも、祝詞の最も古きものは、また大和奠都以前海邊に棲居したりし時代の餘風を帶ぶるものなきにあらずといへども、多くの祝詞を綜合するに、最古の神話時代が漸く轉じて、農事の重視せら

旋頭歌　五七七、五七七の六句より成る一種の歌

片歌　五七七の三句より成る古歌

れし時代に入りて製作せられしものなりと斷言するを憚らず。祈年祭の詞、風の神の祭の詞、または大嘗祭の詞を讀め、いかに當時の國民が耕耘の事に注意し、焦心して、年々の豐凶に全生命を託したりしかを發見せん。またいはゆる天つ罪として大祓の詞に擧げたる畔放・溝埋・樋放・頻蒔の類も、みなこれ農作に關する罪名にあらずや。海事より農事に移れる太古國民生活の變遷は、正に祝詞によりて反映せられたりといふべし。

上古の歌、最も古くは律格いまだ定らず、法則に拘束せられずして、思ふがまゝに感懷を行れりき。記紀の歌を計算するに、短歌最も多くして、長歌これにつぎ、旋頭歌と片歌とは幾ばくもあらず。而してこれらのもの、いづれも詩形區々にして、一句二音なるあり、四音なるあり、或は六音・七音・八九音に及ぶ。格調整ひ、規

則生じて萬葉集に見ゆるが如き、一定の歌體を成し、從つて想形二つながら見るべきものあるに至りしは、おほよそ漢文學の傳來せる應神天皇の朝より後のことゝいふべし。

上古の歌に取るべきは、祝詞におけると同じく、その外形にありて內容にあらず、語句・語調にありて感情・思想にあらず。構想直截明白なりといふの外また奇を認めざるに、措辭いかにも巧妙にして甚だ耳に快し。されど祝詞に比較するに、これには絕えてかれの雄大を見ず、かれが譬喩莊重森嚴、天地と共に大にして、聞くものをして轉た心懷を曠うせしむるあるに反し、これの何ぞ卑近にして平凡なるや。これ一は神に告ぐる祭文なるに、一は人間同志の間に謠はるゝもの、用途の差のやがてこの相違を生じたるや勿論なりといへども、余輩をして更に一歩を進めて

言はしめば、前者はなほ未だ上古民族の抱懷せる征服的氣象を脫せざるに、後者は既に風光明媚の境に定着し、熙々たる春光に浴して、平和の情感を味はふの相違に坐せずんばあらず。試みに二者が用ひたる言辭を引きて比較せんか、等しく自然を寫しても、彼は偉大にして勢力あり變化あるものを好む、故に天といひ、雲といひ、霧といひ、潮といひ、風といふ。是は眼前卑近の小景物を捕ふ、故に谷のみ、磯のみ、河のみ、瀨のみ、島のみ、崎のみ。朝日の日照宮、夕日の日陰宮の二語に、日は僅かに見られたれども、月は詠まれず、星もなし。最も多きは日常目擊接觸する動植物・家具の類にして、動植物もまた實用的なるが多く、植物にては野蒜・粟生・韮・薑・蔓菁・大根・蕁・菱・栗花橘・桑・榛・槻・榊・白檮・熊檮などいづれも衣食住もしくは祭祀の料たるべきものゝみ、葉ひろ・五百箇・眞椿

などは實用の外にして、花も葉も賞せられ、一つ松といへるは姿のおもしろきを愛でたりけん、櫻花・蓮花も歌はざるにはあらざれども、これらの花が歌材となることは極めて稀なり。動物また細螺・蟹・蠣・虹・蜻蛉・鮪・鯨・雀・鴨・鳴・庭つ鳥・鶏・鶺鴒・隼・鵑・猪・馬の類を出でず、家具は、太刀・臭床・菅疊・絹疊の類を見る。男女の姿の玉に比べられたるはその例頗る多く、女子の後姿を小楯にたとへ、齒竝の美しさを稱して椎實に似たりとも形容したりき。

古來自然の美を愛し、花木を翫賞するは、わが國民固有の特色の一なりと稱せらる。されど上古の類を見るに、純然たる敍景詩は甚だ尠く、むしろ人をして奇異の感あらしむ。日本武尊が、

鳴海らを見やれば遠し火高路にこの夕潮に渡らへむかも

と歌ひ、また

宮酢媛
尾張氏の女

鳥羽
ちば
今とばといふ
京都の南

初瀬野
奈良縣磯城郡初瀬町の近く

大和は國のまほろばたゝなづく青垣山ごもれる大和し美は
し

と詠じ給ひし如き、一見敍景の詩なるが如きも、一は境に對して宮酢媛を慕ひ、一は大和を懷うて望鄕の念を述べたる抒情詩のみ。應神天皇が菟道野の詠、

鳥羽の葛野を見れば百千足家庭も見ゆ國のほもみゆ

の如き、雄略天皇が初瀬野に出遊して、山野の形勢を見給ひてのこもりくの初瀬の山はいでたちのよろしき山わしりでのよろしき山のこもりくの初瀬の山はあやにうらぐはしあやにうらぐはし

の吟の如きは、やゝ客觀的敍景詩の體を得たるものといふを得べきが、この種の類は五指を屈するにも足らざるべし。花木に

木花咲耶姫　瓊々杵尊の妃　吾田の大山祇の女
稚櫻宮　履仲天皇の皇居　弊余稚櫻宮

對する、また然り。後世花としいへばこの花となさるゝ櫻だに、いまだ主題としては歌はれざりしなり。さはれ神代既に木花咲耶姫の名あり、紀元後に稚櫻の宮の名あるを思へば、上代の民も花の眞美を知らざるにあらず、賞せざるにあらず、唯いまだこれを歌に詠じて樂しむことをなさゞりしのみ。

既に客觀に乏しうして敍景に貧なり、敍事詩もまた能くするところにあらずとせば、剩すところは主觀的抒情詩のみ。げにや抒情詩は當時の詩人が最も得意とせし壇場なり。武勇を倡道し、兵氣を鼓舞するもかれらが好題目、後世のいはゆる祝言たる新築を賀する歌、置酒高會の歡樂の歌など、また數〻見る所にして、從つて酒德を稱へたるものも甚だ少からず。蓋し酒の穀物と共に上代神饌の隨一たりしは、祝詞の明かに示すところにして、

幸田露伴
文學者
文學博士
名は成行
慶應三年（一八六七）
江戸生

酒の太古の神に人に離るべからざる附隨物たるは、洋の東西を問はざるなり。要するに眞率樸野は太古の國民の特性にして、恬澹快濶なる現實主義は歌謠の上にも漲れりといふべし。

（國文學史講話）

八　大丈夫の覺悟

幸田露伴

大丈夫、苟も身を學藝に委ねんとせば、まづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す。發とは外に內の發するなり。受とは內の外に受くるなり。受くることは須く大海の百川を呑むが如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんことを嫌ひて、川の大川の小を嫌はず、發することの豐かならざらんことを恐れて、方の東、

方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふところあり、發するに問ふところあるは、女兒の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

幸田露伴

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一。受をよくすれば發は其の中に在り。大賢は能く受く、中才は勉めて克く受く、賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんを期する、之を眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦するものは學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪

へざらんとす。何ぞ成ることあらん。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。こゝに於て、毀譽褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒に懼れ、或は徒に驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜むべし、堂々たる六尺の身、他人に簸弄せられたるを悟らず。人を飈風にし、我を粃糠にす。實に自ら待つの薄きのみならず、抑亦學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈此の如くなるべけんや。それ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む、清も亦辭せず、濁も亦辭せず。日に默々たり、洋々たり、而して、漸く我が大を成し、徐ろに我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の、人の言を受くる、亦かくの如し。精雜密疎の說、毀譽褒貶の評、皆一齊に之

をして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まことにかくの如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰か堯の德を傷つくるものとなさん。舜の詩猶存すれども、誹謗の木の文は今何處にかある。

是の故に、學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縱令、滿面の垢辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り、血涌き、劍を拔いて直ちに報いんと欲するに至るとも、亦先づ牙關を咬定して隱忍し、頭を垂れ、心を虛しくする工夫の裏より一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲・馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期す

擊壤の歌
日出ヅ而作シ、日入ヅ而息ツ、鑿シテ井ヲ而飲ミ、耕シテ田ヲ而食フ。帝力奚有ニ於我ニ。（帝王世紀）

舜の詩
南風之薰ル兮、可ヲ以ヲ解ニ吾民之慍ヲ一兮、南風之時ニ兮、可シテ以ヲ阜ニ吾民之財ヲ一兮。（家語）

べし。之を大丈夫の受の覺悟といふ。

人貶すれば便ち受けずして胡言亂說し、人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは、閨閤の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。古に曰く、「峻谷に入るものは當に葛藟を攀ぢて以て顚墜を免るべし、時俗に處るものは當に道義に據りて而して後以て自立するを得ん。」と。學藝に遊ぶものは當に反求の功に賴るべし、漸く深造するあらん。唯反求の功に賴る、則ち揚げらるゝも自滿せず、抑へらるれば、愈奮ふに足らん。

徐子曰く、「今それ身を立つる、人の譽むる所とならずして、人の謗る所となるものは、未だ善をなす理を盡くさゞればなり。善をなす理を盡くすものは將に舜の若くならんとす。舜と同じか

徐子
徐幹字は偉長
後漢の末魏の初の人
中論の著者

五十にして
蘧伯玉年至二五十一而知二四十九年之非一。（淮南子）

らずと雖も、それ敢へて之を謗るものあらんや。故に語に稱す、『寒を救ふは裘を重ぬるに若くはなし、謗を止むるは身を修むるに如くはなし。』と。善いかな言や、能く大丈夫の覺悟を說けりといふべし。古人五十にして四十九を非とす。今、我、昨の我を是として後の我に望むなくんば、我の死するや久しかざらん。」大丈夫當に受發の二途に於て、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡くすあるべし。子思曰く、「能く其の心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せん。」と。爲す所ありて美とせられず、內に求めずして人に責むる、其の情は憫むべし、其の爲は悲しむべし。我豈、人の勝つを好むを陋とするのみならんや、我また、實に之を愧づ。倣はんかな海や、百川其れ海を如何せん。（露伴全集—讕言）

參照（一）卷九、國文學の精神　卷八、國文學の研究

國文學史

序說

もろ〳〵の藝術は同じくこれ思想感情の反映なり。中にも文學は言語・文字を以て表現の材料とするが故に、他の藝術卽ち音響による音樂、色彩・線條・形體による繪畫・彫刻・建築、肢體の運動による舞踊、さてはこれらを綜合せる演劇等に比して最もその永續性と普及性とに富めり。是、文學史が藝術史上特に重要なる地位を占むる所以なり。苟も國民文化の由來を討ね將來その理想的發展を遂げしめんには、國文學史によりて我が祖先の精

神生活を味はひ我が國民性の特色を研究せざるべからず。今左に國文學史の大要を說かん。

一 上古の文學(二)

第一 祝詞

上古の祭祀は卽ち政治なり、故に政を訓じて「まつりごと」といふ。敬神崇祖の民族が皇室を中心として祭祀の庭に集り、祖先の勳業をしぬび、よりて以て團結せるは卽ち我が建國の體裁なり。この時未だ文字なし。必ず口々に傳誦せられたる詩的美辭ありてこの祭祀に伴なひしならん。壽詞(よごと)といひ、祝詞(のりと)といふもの卽ち是なり。(三)

祝詞は、天皇卽ち現神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に

參照(二) 卷七、10 明淨直

參照(三) 卷十、七 上古の詩歌

國家の安穩國民の幸福をねぎ求むるを以て主眼とす。國民が現世の福祉を求め、淸淨を愛する風は、皆祝詞の中に之を認むべく、支那・印度の文明の感化未だあらはれざる上代の國民思想は明かに我が祝詞式の祝詞にあらはれたりといふべし。

文辭上より祝詞を見んか。その語彙の數は甚だ多からず。「常磐に堅磐に」。「祓へ給へ、淸め給へ」。の如く對語を連用すること多し。こは單語のみならず、句に於ても亦然り。「朝には御門を開き、夕べには御門を閉て」。「みかのへたかしり、みかのはらみてならべ」。の類是なり。かく同一音・同一語を反復するは、一面に於て單調に陷るを防ぐと同時に、又自ら莊重正大の風を添ふる所以なりといふべし。

第二 歌謠

參照(四)　卷十、六、忍坂の大室屋　卷十、七、上古の詩歌

參照(五)　卷十、二、寧樂の句　卷十、三、歌の調子

(四)上代の歌謠はその形式未だ一定せず。一句の語數も定まりなく、長歌・短歌の別もなし。唯長短句を錯綜せしめ、疊句・對句を列ねて聲調をよくするのみ。その內容は極めて單簡にして、物に觸れ、事に感じて纔かに直覺的情緒を述べたる者に過ぎず。然れども、自然と人とを結合することは夙く已にこゝにあらはる。敵軍の來襲するを雁の田に下るといひ、戰亂の治るを雨の歇むに喩ふる類、皆人事を以て自然に喩へたるものなり。かくて上代の歌謠は個人的抒情詩として、祝詞は民族的祭神の詞、寧ろ敍事詩として、國民最古の詩的產物たり。支那文化の影響の未だ及ばざりし太古國民の文學として、興味の最も深きを覺ゆ。

(五)萬葉集は短歌四千百餘首、長歌二百六十餘首、旋頭歌六十餘首の大歌集なり。萬葉時代、委しくいへば、藤原朝卽ち持統・文武の朝以後、始めて和歌の形式の非常に擴大し、長歌の發達せしは顯著なる事實とす。中にも柿本人麿の作歌には長篇頗る多く、その歌雄渾壯大なり。上代の文學としての祝詞は古來の舊辭を敍し、傳說を述べて數百言を陳ねたるに、咄嗟の間に成るを主とせる歌謠は概ね五十言に滿たず。今や人麿は民衆共同の祝詞の形式を以て之を個人の抒情詩に應用せしなり。然れども人麿が功績は單にその形式を擴大せしのみにはあらず、實は祝詞中に含有せる敬神崇祖の精神を抒情詩として歌ひ出せるに存す。山部赤人は人麿に比すれば概して詩形の簡單を喜び、歌中の句法も亦短き文に分割し得べく、人麿の如く一瀉千里の勢なし。その長は瀟洒にあり、簡潔にあり。富士山の歌の如き、雲・雪・山・河等の語を用ひたるのみにて、高潔崇高の風韻を帶ぶること富士

山そのものに彷彿たり。これ亦祝詞の神を傳へたるもの。山上憶良に至りては、支那に遊べることあり、漢學に通じ、佛說を喜ぶ。詠ずる所皆支那思想・印度思想に基づき、歌の序としては、漢文の四六文を用ひ、儒・佛の影響最も顯著なり。

第三　歷史

大化の改新、支那文化の輸入は自ら國運の進展を促し、茲に修史の事業は起り、地誌の編纂は企てられたり。その古事記・日本書紀は傳へて今日に至りたれども、風土記は多く亡佚せり。古事記は神代より推古天皇までの歷史にして、稗田阿禮が舊辭を誦せるを太安麿等が筆記せるものなりといふ。從つてその文は大體古くより口々に言傳へたるまゝに寫せるものなるべく、日本第一の古典なり。就中神代の卷は神話・傳說・歌謠等に富み、

參照(六)
卷十、四　素戔嗚
尊
同、五　天石屋戸

最も趣味多し。日本書紀は漢文體の國史にして、古事記と共に貴重なる文獻なり。

太古より奈良朝に至るまでは、その間の年代頗る長く、一般文化の發達、之を祖先建國の昔に比ぶれば、亦實に霄壤の差ありしなるべし。然れども未だ國字を有するに至らざりき。今總じて之を上古と稱す。（芳賀矢一著國文學歷代選に據る）

二　平安時代の文學

第一　和歌

平安時代は支那の文化の次第に我が文化と融合したる時代にして、我が特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。就中文學上に最も大なる關係を有するは假名文字の製

作なり。

奈良時代に於ては、今日の如き假名の製作なかりしが、この時代に至り、或は漢字を草體にし、或はその扁旁を割きて假名となし、音標文字として用ひたるより、漢文・漢詩の製作は朝廷の科擧に必要なる科目たりしに關らず、一面に於て國語を以て記せる純國文學の發生を促し來り、當時の建築・彫刻・繪畫等が日本式の發達をなしたると同じく、文學も亦特殊の發達をなして、支那の强大なる文化に壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。

假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは清和・文德以後にあらんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。而して和歌の發達と之に對する賞翫とは、あらゆる文學の根柢をなせるが如し。

紀貫之 天慶九年(一六〇六) 卒 年六十五 參照(一) 卷七、三 あさみどり

延喜の朝、紀貫之・凡河内躬恒等勅を奉じて萬葉集以後の歌をえらぶ。(一)古今集是なり。古今の歌を取りて萬葉のに比すれば、その內容を增加せること最も著し。是、佛教思想と六朝詩賦の思想とを短歌中に移植したればなり。造句の法も、古今に至りては修辭上の進步著しく、譬喩・緣語・懸詞等最も巧緻に使用せらる。萬葉集は初心なる趣ありて簡古の味に富み、古今集は巧緻の境に進みて勁健の趣なし。自然と人生との融合はこの時代に至りて全く完成し、春花・秋葉・雪月の美、歌に詠ずべき題目は多くこの時代に確定せられ、春の鶯、夏の杜鵑、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴なふ禽獸もまたおのづから一定し、春の花の盛には人生の樂しき朝をおもひ、萩の上の露にははかなく消ゆる死の運

命を悲しむ。和歌の約束悉くこゝに成立して、後の文學は皆之に則るに至れり。

第二　日記

貫之は和歌に於て久しく後世の模楷たりしのみならず、國文を以て始めて和歌序を作り、勅撰集序を記し、又日記をものし、以て國文をして歌文と並行する地位に立たしむるに至れり。是、貫之の國文學に於ける殊功といふべし。就中土佐日記(二)は、土佐守の任果てゝ京に歸りし海路の日記にして、自ら婦人に託して之を記せり、その文體簡樸にして輕妙、往々諧謔を交ふ。日記の巨擘と稱せらる。

參照(二)
卷九、七　土佐日記鈔

當時男子の日記は漢文にて記し、官邊の事歴、日常交際上の事柄等を多く記入せるに對し、深窓の女子は國文を以て日記をものしたり。而してその記事は主として閨閤の事に關し、家庭の間に限られたるは當代の事實にして、花鳥風月の媒介となれる和歌はその波瀾に際して好箇の記念となり、讀者の感情を動かすに足れり。蜻蛉日記は右大將道綱の母の日記にして文辭精錬見るべし。和泉式部の日記は才華は見えたれど輕佻浮華の本性あらはれたり。紫式部日記は中宮の侍女として宮仕の樣を寫せるものにして、容貌言語より衣服調度の末に至るまで、流石に機敏なる觀察力を認むべし。更級日記は菅原孝標の女の筆に成り、紀行文あり、抒情の文あり、夢を敍し、傳說を敍す、また一種の日記なり。

道綱の母
藤原倫寧の女
攝政藤原兼家の室
右大將藤原道綱の母

和泉式部
歌人大江雅致の女
和泉守橘道貞の室
夫の歿してのち藤原保昌の室となつた

菅原孝標の女
孝標は道眞の玄孫
孝標の室は倫寧の女即ち道綱の母の妹

第三　物語

この時代に於ける和歌の流行はまづ和歌に關する物語を生め

り。伊勢物語は和歌についての傳說集といふべく、在五中將の初冠より書き起して、その今はの時の歌を以て筆を收む。書中のむかし男は業平のことゝ解せられ、その歌も悉く業平の作と見做さるれども、業平以外の作者の歌も加れり。要するに人口に膾炙せる今古の名歌を基礎として、その由來を說き、之に背景を點出したるものといふべく、之を名づけて歌物語と稱するを得べし。伊勢の後に、同じく名歌に關する說話を收めたる大和物語あり。伊勢物語と相並びて後の歌人に尊敬せられたり。竹取物語は物語の祖と稱せらるれども、後の物語類とはその性質を異にし、月中女子の傳說を骨子とす。その說話の一段毎に言語の滑稽を以て結び、之に和歌を添加せるは、尙歌物語の性質を有せりといふべし。うつぼ物語・落窪物語等これについで出

參照(三) 卷七、四 吾妻下り

參照(四) 卷九、六 かぐや姫

で、遂に平安朝物語の白眉として源氏物語は生まれたり。

源氏物語五十三帖は紫式部の著す所なり。前篇は光源氏を主人公としてその得意の狀を寫し、後篇の宇治十帖は薰大將を主人公としてその失意の樣を敍す。全篇の脚色整然として紊れず、主人公を圍繞せる各種の女性の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。蓋し源氏の大作たる所以は、人物の描寫が活躍せると共に、自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點にあり。人情の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。人事と自然とを融合せる詩的思想はこゝに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、他の文には必ず歌の景情を含めり。若しそれ、散文としての外形より見んか、純國語として最も發達せる種々の形式を發見し得べし。故に古今集が和歌

參照(五) 卷九、二 源氏物語

の模範文學たるが如く、源氏物語は國文として後世の模範文學となれり。源氏の用語は、恐らくは當時の上流社會貴婦人の通用語なりしなるべし。母音多く、敬語に富める國語の一層進歩せるものにしてに・を・が等の接續的助辭を以ていくつとなくその句を連接しゆき、一文にして一頁に亙るもの亦稀有に非ず。嫋々として風に靡く野萩の花の如く、優雅艶麗、裳・唐衣、裙帶長く垂れし當時の婦人の楚々たる姿に似たるものあり。

第四　隨筆

源氏物語と相並びて國文の雙璧と稱へらるゝものは清少納言の枕草子(六)なり。枕草子の妙はその隨筆たる點にあり。忽ちにして人事、忽ちにして自然、或は公事を評し、或は人物を品し、或は自己を誇り、或は皇后を褒め、閲讀の間多種の事件に遭遇して、殆

参照(六)
卷九、10 枕草子鈔

ど應接に遑あらざるなり。その變化、その錯綜、こゝに始めて全篇の妙味を成し來る。文章の妙味も亦句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽ちにして花をいひ、忽ちにして小兒に移り、又草花を點じ來り、再び人事に入り、忽ちにして今、忽ちにして昔、時と場所とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず種種雜多に、想像の到るかぎり捕捉し來る。その變化轉換の妙卽ち人を魅するに足るなり。枕詞・懸詞の妙味は、元來人をして一事を思念せしめて忽ち他の事物に轉ぜしむるにあり。枕草子の文は卽ちその手段の最も發達せるものなり。或事柄に執着固定せずして、一時に多方の興味を惹起す妙機を捕へ得たる所以は、卽ちその文の輕妙洒脫の氣を帶ぶる所以なり。

平安朝の世は平安の都の今を盛と榮えたる時にして、上流の紳

士は、詩歌に、音樂に、舞踏に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を曳きて頻繁なる年中行事に仕ふる樣の如何に優美なりけん。それらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。而も平安朝の上下の事情を見るべきものは今昔物語に如くはなし。今昔物語は文學の作品といふべからざれども、印度・支那・日本に亙りて種々の奇談雜話を類聚したるを以て、啻にわが國の傳說を知る上に於ての珍書たるのみならず、眞に世界傳說研究者に取りて至寶といふべし。抑、儒佛二教が我が國民の思想界を一變せしめたるは言ふまでもなけれど、之と共に各種の傳說童話も亦輸入せられ、僅かに其の人と處との名を改めて日本化せるもの甚だ少からず。凡そ我が國佛教渡來以前には因果應報の談もなく、輪廻轉生の說もなく、禽獸妖怪の話もなかりき。今昔

は實に國文を以てこれらの多數の說話を集め得たるものなり。鎌倉以後に至つて、これらの說話は皆文學の中に吸收せられ、一面より見れば大いに我が文學をして豐富ならしめたるもの、今昔の中にその淵源を探り得べし。

第五　歷史

平安初期の歌物語一變して小說的物語となり、日記となり、再變して歷史物語を生ぜり。

榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始りて、堀河天皇の紫野の卷に終ると雖も、要は關白道長が一代の榮華を寫せるものなり。この書一名世繼物語と稱せしは、歷史物語といふにひとし。歷史と稱すといへども宮廷の歷史なり、後宮の歷史なり。この點に於ては假構物語といくばくも異ならず。物語の名も

參照(七)
卷八、一五　法成寺の造營

亦ふさはしといふべし。

文學上の價値より見れば、大鏡は遙かに榮華の上にあり。大鏡(八)は歷史として列傳體を取れり。而して藤氏の榮華を寫すは全く榮華に等し。雲林院の菩提講に來り合へる大宅世繼・夏山繁樹二人の老翁の談話として之を記し、間〻傍聽者の意見を挿み、全體の構造の詩的なるは文學的の性質を存して正史のこちゝしきところなし。その文の、勁健にして筆端褒貶の意を含めるは、恐らくは男子の作なるべし。この二者は藤原氏時代の最後の文學として藤原氏時代の最後の榮華を寫せる者なり。之を要するに、平安時代は前後四百年に亙り、古代文化の最も光彩ありし時代にして、江戸時代と共に我が國に於ける文學隆盛の二大時期とす。されど當時の文化は上流の社會に限られて

參照(八)
卷六、一九 菅原の大臣
卷八、一四 藤原道長

一般の社會に及ばず、事物の發達すべて貴族的傾向を帶び、第宅・衣服等實用を離れて粉飾に過ぎ、輕快を重んぜずして綺麗を喜ぶ。從つて文學も、物語は深窓消閑の玩具、和歌は貴族交際の媒介として帝都上流の間に行はるゝのみ。下流の情想を寫したる作品は、殆ど世に出でざりき。(芳賀矢一著「國文學歷代選」による)

三　鎌倉室町時代の文學

第一　軍記

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し困憊して生活に餘裕なし。從つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、已むを得ざる所なり。

當時專ら武家の祐筆となり參謀となりし文筆に從事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば、この時代の文學に佛教的傾向の存すること平安朝より甚だしく、到るところに無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。

當時漢學漸く衰へ、上流の士も多くは純粹なる漢文を書き得ず、こゝに和漢混淆の一種特別なる文體を生ぜり。和漢混淆體の大いに光彩を放ちたるは、源平爭鬪の次第顚末を記したる軍記類なり。抑源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞する者を

參照(一) 卷五、一四 鎭西八郎爲朝
參照(二) 卷六、四 頼朝の遠流
卷七、二一 光頼卿の參內
同、二三 待賢門の戰
參照(三) 卷四、一九 扇の的
卷六、一六 宇治川の先陣
同、一七 佐藤嗣信の最後
卷七、八 大原御幸

して、自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは保元(一)・平治(二)の兩物語にして、共に簡勁を以て勝れたり。ついで出でたる平家物語(三)は蓋し曲節を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縱に雄大悲壯なる戰記を以て貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奧妙の佛教趣味を點綴す。されば治承の春を名殘に壽永の秋に西國さして落ちゆける、夢よりもはかなき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句々同情あり、讀む者をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。」といふに起して、最後の卷には、建禮門院が後白河法皇への物語

に、其の經過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。源平盛衰記は、平家物語の一本とも謂ふべく、たゞその記事詳密にして、文章頗る華麗なるを異なりとするのみ。

太平記は平家物語に倣ひて作れる者にして、後醍醐天皇の御即位に筆を起し、爾後五十年間の戰亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げ、數多の忠孝節義の士の事蹟を點綴して、其の間に倫理的宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢字を用ふること更に著しく、文脈亦漢文調を加へたり。

義經記・曾我物語の二書は個人に關する敍事詩と見るべく、一は源平武人中最も傳奇的生活をなせる義經を主人公とし、一は孝子復讎の嚆矢なる二孤を主人公とし、共に貞操・人情を主とした

參照(四) 卷四、一八 鴨越

參照(五) 卷三、三 村上義光 卷五、四 千劍破城の事 同、五 隱岐の御還幸

參照(六) 卷四、六 十三夜

る物語を傳へたり。從來の軍記に比して一層平民文學に近づけるを認む。

第二　隨筆

軍記に先だちて、和漢混淆體の文を用ひて、成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は鴨長明が源平の紛爭絶え間なき世を厭ひて山城の日野に隱栖せることを記せる短篇にして、文辭の流暢を以て顯る。

紀行文には阿佛尼の十六夜日記あり、土佐日記の系統に屬す。東關紀行・海道記等あり、作者は詳かならず、國語漢文を混和し、古歌古句を引用するところ鎌倉文學の性質をあらはせり。

これらのものと稍その趣を異にし、率直平易なる文體にて書けるものに十訓抄・古今著聞集・宇治拾遺物語あり。何れも平安朝

參照(七) 卷五、三 東路の旅

參照(八) 卷七、九 和邇部用光

參照(九) 卷七、九 鳥羽僧正

參照(一〇) 卷六、二 雀

時代に出でたる今昔物語などに倣ひて古今の面白き事實を集めたるものなり。(一一)徒然草は兼好法師の作にて、その趣味を談じ、世態人情を說く間に著者が修得せる道德主義によりてよく皮相の虛飾を透して隱れたる社會の裏面を觀察し、爬羅抉剔痛快にそが矛盾撞着のあるところを暴露せり。文章も亦暢達にして雅馴、交ふるに奇句警語の天外より落ち來るものを以てし、かの枕草子と併せて以て隨筆の雙美と稱せらる。

參照(一一) 卷三、二 仁和寺 卷四、三 四時のあはれ

第三　歷史

歷史としては神皇正統記・增鏡等最も見るべし。(一二)神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業敗れて王道の衰頽せるを憤慨し、古の歷史に照らして皇統の正閏を論じ、三種の神器の

參照(一二) 卷六、五 北條泰時

在るところ、卽ち名分の存するところなるを疾呼せるものなり。是、實に國文を以て綴れる議論文の權與ともいふべく、婉曲なる字句のうちに博大なる風格を藏して、堂々としてまた朗々たり。(一三)增鏡は大鏡に倣ひて、後鳥羽天皇の御卽位より後醍醐天皇の隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず。文章亦流麗なり。

第四　和歌

和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には、後鳥羽天皇の勅により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の勅撰實に八度に及びしが、就中古今と新古今と殊に勝れたり。(一四)新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的敍景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げしも

參照(一三) 卷七、七 承久の役

參照(一四) 卷九、五 比良の嵐

のといふべく、句調流麗、その新奇なること前古無比と稱せらる。從つて當時有名なる歌人亦少からず。まづ俊成あり、西行(一五)あり、寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝(一六)は萬葉の古調を喜びて金槐集を成す。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば、後者は最も暢達の調を尚べり。

又和歌に代りて、連歌の興れるもこの時代のことなり。先に二條良基これを好み、勅撰に准じて菟玖波集を撰したりき。後に宗祇の出づるに及びて、その流行絶頂に達す。宗祇旅行を好みて歌才を養ひ、曾て定居なし。勅を奉じて新撰筑波集を撰す。海内風靡して斯道の宗と仰ぐ。門人に宗長・肖柏最も名ありき。戰國の世、文運いよ〳〵衰へ、都鄙の懸隔減じ、貴賤の階級壞れ、京

參照(一五)
卷八、三　歌人西行
卷八、四　山家金槐集鈔
參照(一六)
卷八、四　山家金槐集鈔
同、五　名殘の星月夜

二條良基
撰政太政大臣藤原良基
元中五年(二〇四八)薨
年六十九

宗祇
連歌師
飯尾氏
元龜二年(二一六二)寂
年八十二

宗長
連歌師
駿河の人
花の下宗匠
天文元年(二一九二)寂
年八十五

肖柏
連歌師
堺の人
大永七年(二一八七)歿
年八十五

山本霞む
見渡せば山本霞む水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ
(後鳥羽天皇)

師の貴族等が文學を獨占したる風の失はるゝや、連歌は武人消閑の具として用ひられ、漸く平民文學としての傾向を示するに至りぬ。

水無瀬三吟百韻のうち(連歌)

雪ながら山本霞むゆふべかな　宗祇
ゆく水遠く梅にほふ里　肖柏
河風にひとむら柳春みえて　宗長
舟さす音もしるきあけがた　宗祇
月やなほ霧わたる夜に殘るらん　肖柏
霜おく野原秋はくれけり　宗長

第五　謠曲

室町幕府の世になりては、戰亂相繼ぎて隣戰遠攻に干戈相見え

ざる日とてはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんとして暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては遂に急潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ四方に滿ちぬ。艶麗なる百花は平和なる春にこそ咲誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいかでか榮えん。されば文學の如き、全く度外に置かれて、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。

されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に墜ちず、殊に將軍義滿は、柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に遭へりと雖も社會の辛酸を知らざるが如く、それ〴〵閑居を設けて、文雅風流を樂しめり。されば水墨の畫、香茶の技などの發達せしもこの時にして、能樂の勃興に伴なひて當代唯一の文學たる謠曲を生じたるも、實に此の時代なりとす。

謠曲(一七)は將軍義滿の時、世阿彌元淸によりて殆ど大成せられたるものにして、その中には多く佛教の思想を含む。趣向は幽靈顯れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によりて、成佛するもの多きを占む。詞句は好んで古文辭を補綴すれども、皆よく諧和して水晶盤上球を轉ずる如き好調に富む。

能樂の餘興に狂言(一八)といふものあり。その技、能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、概して罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむるものあり。その文は當時

參照(一七)
卷七、六　謠曲
卷四、七　夜討曾我
卷七、五　隅田川

世阿彌元淸
謠曲の大成者
嘉吉三年(二〇三)歿
年八十一

參照(一八)
卷四、八　栗燒

の言語をその儘に寫せるものにして、率直愛すべし。之を要するに、この時代は多少特色ある文學を產せざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり、まづは兩盛時を繫ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。（藤岡作太郎著日本文學史教科書に據る）

四　江戸時代の文學

江戸幕府の世は泰平打續きて、殆ど兵戈の動くを見ず、文化の進歩前古に比なし。學問・藝術上下に弘通して、四民ともにその澤を享け、文學の滋味も普く一般に味はるゝに至れり。されど幕府の施設漸く成るに從うて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、從うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を玩び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戲曲・小說の類を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陷る。學識あるものは新興の文學を賤しみ、新興の文學に就くものはみづから卑うして高尙なる趣味を解せず。かくて戲曲・小說の如きは戲作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

江戸時代の前期は京阪を中心とせる文學にして、寬永に萌し、元祿をその盛時とす。所謂元祿文學なり。後期は江戸を中心とせる文學にして、寶曆・寬政を經て文化・文政をその絕頂とす。所謂大御所時代の繁昌は文學にもあらはれたるものなり。今、江戸時代の文學を左に概說せん。

第一　漢學

抑〻江戸時代に於て文學復興の魁たりしは漢學なり。されど、寛永の頃は打續きたる戰亂の後を受けて、未だ詩文に心を潛むべき餘裕なく、有識の士は寧ろ儒教によりて社會の秩序を恢復せんとしたり。かくて儒教の興隆に功ありしを藤原惺窩・林羅山とす。家康の京都にあるや、屢〻惺窩を延いて經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず、門下の俊才羅山を薦む。これより羅山の子孫代々儒を以て幕府に仕ふ。この二人が奉ぜしは宋の朱熹の學なり。朱子學は實に惺窩・羅山等出でてより大に世に行はるゝに至れるなり。朱子學の外に、近江の人中江藤樹、明の王陽明の學を奉じて實踐躬行を勵み、近隣その德に服して皆善に移れりといふ。熊澤蕃山これに學び、備前侯に仕へて治績あり。元祿時代に至るや、將軍綱吉漢學を好み、屢〻儒者を集めて經義を

鳳岡
林信篤
享保十七年（一三九二）歿
年八十九
木下順庵

名は貞幹
元祿十一年（一三五六）歿
年七十八
參照（一）
卷五、一三 木下順庵
參照（二）
卷一、一三 おもひで
參照（三）
卷一、一四 立志
伊藤仁齋
名は維楨
寶永二年（一三六五）歿
年七十九
東涯
伊藤長胤
元文元年（一三九六）歿
年六十七
荻生徂徠
字は茂卿
享保十三年（一三八）歿
年六十二

討論せしめ、又自ら經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る熾に、學者一時に輩出す。林家には羅山の孫鳳岡幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、後江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に新井白石・室鳩巣等著名の士多し。殊に白石は學博く識高く、有益の著多く、行文犀利にして透徹せざる所なし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。伊藤仁齋京に起り、朱子學は孔孟の古意にあらずとして別に古學を立て、その子東涯博覽にしてよく父の學を祖述す。荻生徂徠江戸に在り、亦朱子學を駁して古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙せり。

第二　國學

元祿時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯德川光圀とす。明の遺臣朱舜水を聘して學を講ぜしめ、又彰考館を開きて

朱舜水
名は之瑜
天和二年(一三四二)
歿
年八十三
參照(四)
卷五、三 人の問に答ふ

下河邊長流
貞享三年(一三四六)
歿
年六十三

釋契沖
元祿十四年(一三六一)
寂
年六十二

荷田春滿
元文元年(一三九六)
歿
年六十九

參照(五)
卷四、四 賀茂眞淵

大日本史を撰す。(四)その學の重んずる所、大義名分を正すにあり き。光圀身は幕府の近親、奉ずる所は支那の儒學なり。この境遇の桎梏を脱し國體の存するところを明らめて自覺せる國民の指南車たらんとせる光圀亦偉なるかな。光圀又古典の研究に志あり。下河邊長流に託して萬葉集を註釋せしむ。長流は大和の人、歌文に通じ、中古以來の僻說を捨てゝ先人未發の見を立つ。不幸業を終へずして歿す。釋契沖その業を繼ぎ、萬葉代匠記を著す。契沖攝津の人、僧籍にありて國文を好み、造詣至りて深く、識見世に絕す。奈良文學の眞價は契沖によりて闡明せられたるなり。

享保の頃、京に(五)荷田春滿あり。國史・律令に通じ、古意を明らむるを以て己が任とす。いはゆる國學とて古典を究めて國體のあ

參照(六)
卷四、四 賀茂眞淵
卷五、二 櫻の詞
同、三 春の心

田安宗武
八代將軍德川吉宗の子
田安家の祖
明和六年(一四二九)
卒
年五十四

る所を學ぶは、この人に起れるなり。嘗て歌うて曰く、

踏分けよ倭にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは

と以てその學風を見るべし。幕末勤王攘夷の說の沸騰せるは、水戸學と國學との感化與りて力ありき。

(六)賀茂眞淵は遠江の人、京に出でて春滿に學び、學成りて後、江戸に來りて講說し、田安宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いでわが國固有の道を明かにするにあり。謂へらく、「昔、儒佛の敎の傳はりしより古道はこれが爲に廢れぬ。故に古道を明らめんとせば、外國の影響なくして人意の自然に出でたる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善し」と。よりて深くこの書を究む。その研究、契沖に一歩を進め、その說く所一世に影響せり。識見甚だ高しと雖も、詩文の才は寧ろ學問に勝

れり。門下に高材の士多くして、これより國學の勢、天下を席卷するに至れり。

眞淵の門人多きが中に伊勢の本居宣長(七)、最も名あり。宣長の學は一に古道を明らむるにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に從事し、三十四年を經て業成る。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉代匠記とあはせて江戸時代國文學界の二大作たり。宣長なほ多くの著述あり。宣長の研究態度たるや博引旁搜盡くさゞるなく、具さに諸說の異同を辨じ、これを歸納して始めて自家の結論に達す。故を以て論據堅實、識見超凡、洵に一代の大家たる概ありき。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子平(八)田篤胤最も著る。篤胤は出羽の人。その意宣長より一歩を進

參照(七)
卷二、一九 本居翁の遺蹟
卷二、二〇 おのが物まなび
卷三、二 菅笠日記
卷四、一五 縣居大人の御諭し言
卷九、一一 源氏物語

平田篤胤
天保十四年(一三〇三)卒
年六十八
參照(八)
卷二、二一 臨終の平田篤胤

めて古道を以て一の宗教とし、之を弘布して、儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の說はこれらの論によりて益〻刺戟せられたり。

第三　和歌

加藤千蔭(九)・村田春海(一〇)は共に江戸の人、亦眞淵の門に出づ。學問は宣長の博きに比すべきにあらざれども、何れも文學に長じ、殊に歌道に於ては、所謂江戸派の代表者たり。二人の詠ずる所は、その師の如く萬葉調に非ずして、古今風に交ふるに新古今風を以てしたるもの、その優雅なる格調は、自ら江戸泰平の寬潤にして悠々たる趣を味はしむ。當時、京の文壇に於て、香川景樹の歌道を一新したる功は特筆大書せざるべからず。景樹の歌論は、意は古の誠實なるに倣ひ、詞は今の通じ易きを取り、殊に聲調を重

加藤千蔭
文化五年(一八〇八)歿
年七十四
村田春海
文化八年(一八一一)歿
年六十六
參照(一〇)
卷三、一四 國のしづめ
參照(一〇)
卷六、二一 小品四章
香川景樹
天保十四年(一八四三)歿
年七十六
參照(一〇)
卷五、三 春の心

良寛
天保二年(一八三一)
寂
年七十五
井出曙覽
明治元年歿
年五十七
大隈言道
明治元年歿
年七十一
參照(一一)
卷三九　童心

參照(一二)
卷三〇　郭公
四方赤良
太田南畝
蜀山人
文政六年(一八二三)
歿
年七十四

んずべしといふにあり。調とは人心の祕奥より流れ出づる悲喜の情の口に上り辭となりて、自ら音節を具するもの是なり。その派を桂園流といひ、大いに世に行はれたり。

この他幕末の歌壇に最も異彩を放てるものは、越後の僧(一一)良寛、福井の井出曙覽、福岡の大隈言道等なり。これらの人は、從來諸派の類型を脫し、全く獨自の歌境に立てり。その構想の洒落輕妙なる、その觀察の微細奇拔なる、その句法の斬新にして自由なる、正に一生面を開けるものといふべし。

和歌の想の滑稽にして詞の卑俗なるものを狂歌(一二)といふ。滑稽趣味の歌は既に萬葉集にこれあり、それより往々これを詠ずるものあり。江戸時代に入りては、泰平の氣特にその振興を促し、寶曆前後より化政度にかけて狂歌師一時に輩出す。中にも四

參照(一三)
卷八、七　初時雨
卷五、二　牡丹
松永貞德
承應二年(一六五三)
歿
年八十三
西山宗因
天和二年(一六八二)
歿
年七十八
參照(一四)
卷八、六　奥の細道
卷八、八　芭蕉と去來
卷九、三　幻住庵の記
卷九、四　猿蓑鈔
北村季吟
松永貞德の門人
湖月抄等の著者
寶永二年(一七〇五)
歿
年八十八

方赤良和漢學の根柢あり、最も滑稽の才に富み戲謔口を衝いて出でたり。

第四　(一三)俳諧

江戸幕府の世に俳諧の興りて、連歌より獨立せるは、實に京の人松永貞德の唱道によれり。されどその作なほ幼稚なり。この一派を古風と稱す。ついで西山宗因大阪に起り、舊格を打破して放縱なる一體を創む。之を談林風といひて、一時大いに行はれたり。宗因は才氣縱橫、辭藻口を衝いて發せりと雖も、內容は之に伴なふ能はざりき。要するに、古風と談林風とは平民文學として俳諧を廣めたるをその功とすべきのみ。

元祿に至り、革新の旗を飜して天下の俳風を一變したりしは(一四)松尾芭蕉なり。芭蕉は伊賀の人、京に出でて、北村季吟の門に古風

を學び、又流行を追うて談林風を弄ぶ。後江戸に來りて正風を起し、また東西に周遊してその風を擴む。詠ずるところ人事よりも自然に多く、幽玄清澹にして廣く雅俗にわたる。芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化せり。漢語を用ふること多く、絢爛の趣ありしはその初めなり、花實併せ得んことを欲して苦心慘澹たりしはその中なり、切瑳琢磨の切を終へて成る所却て平易に言ふべからざる味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得たる信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳諧をして李杜の詩、西行の和歌と比較して軒輊するところなきに至らしめたり。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人には豪放なる榎本其角、溫和なる服部嵐雪等俊秀の士諸國に多し。

榎本其角
寶永四年（一三六七）
歿
年五十六

服部嵐雪
寶永四年（一三六七）
歿
年五十四

その後、風調漸く卑俗に流れしかば、天明の頃、これを慨して革新を唱ふるもの東西に起れるが中に、京の與謝蕪村その最たり。蕪村畫を善くし、粗放奇拔、自ら謂へらく「われに師なし、自然を以て師とす」と。かくて、畫・俳相俟ちてその才を發揮せり。蕪村好んで、自然の景物を詠じ、漢詩の趣を傳へ、またよく歷史的事實を材料とす。芭蕉は靜寂の趣を得るを以て旨とせしが、蕪村は進んで活動の態を捉へんとし、人事の消息、時間の經過をも寫さんとせり。要するに蕪村はその句を活躍せしめ又複雜ならしめたるなり。芭蕉と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有[一七]は尾張侯の臣、其の俳文は特に淡雅輕妙を以て聞ゆ。小林一茶[一八]は信濃の產、その句、表は飄逸粗野にして、裏に深刻なる生活苦と人間愛とを藏す。自ら別調なり。

與謝蕪村
天明三年（一三四七）
歿
年六十八

横井也有
天明三年（一三四五）
歿
年九十二
參照（一五）
卷五、二）百蟲譜
參照（一六）
卷三、二）幼兒

柄井川柳
寛政二年（一七五〇）歿
年七十三
參照（一七）
卷四、二一 煤拂ひ

參照（一八）
卷八 二一 馬追三吉
卷八、三 近松と西鶴

竹田出雲
享保十二年（一七二七）歿
年八十一
參照（一九）

天明のころ柄井川柳巧に人生の弱點を捕へ、これを落首卑近の句に仕立て、皮肉なる諷刺を試みたり。所謂川柳（一七）點是なり。亦これ江戸泰平の氣運に乘じたるものに外ならず。

第五　戲曲

戲曲は謠曲等より出で、江戸時代に至りて大いに發達せり。元祿の頃（一八）近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に淨瑠璃を作る。淨瑠璃には時代物と世話物とあり。時代物はその舞臺を過去に取り、世話物は目前現在の出來事を仕組む。近松が全力を盡くしゝは時代物にしてその量も十の八を占む。されど今日不朽の價値ありと認めらるゝは寧ろその世話物にあり。寫す所、人情の祕奥を穿ち、才藻涌くが如く、行筆の自在なること行雲流水に似たり。ついで竹田出雲（一九）あり、文才は門左衛門に及

卷六、二〇 寺小屋
近松半二
天明三年（一七八三）歿
年九十九
參照（二〇）
卷二、一六 巡禮唄

參照（二一）
卷八、一〇 借家大將
卷八、三 近松と西鶴

曲亭馬琴
瀧澤解
嘉永元年（一八五〇）歿
年八十二
參照（二二）
卷三、三 戲作三昧
卷三、三 芳流閣

ばずと雖も、趣向の變化に富めることは却て之に勝れり。今日世に行はるゝはその作に多し。近松半二（二〇）はまたその門に出づ。

第六　小說

小說は元祿の頃、京阪に榮えたり。井原西鶴（二一）大阪に出でて數多の浮世草子を著し、從來の幼稚なる小說を一轉して、巧に世間の風俗・人情を寫せり。その文輕妙奇拔にして、法格に拘らず、社會の裏面を描きて微細を極む。殊に晩年、町人社會を寫せるものに至りては圓熟の境に入りたるものゝ如し。

文化・文政の頃に至り、江戸に作者輩出せり。中にも曲亭馬琴（二二）は學問該博にして文藻絢爛なり。椿說弓張月・里見八見傳等、その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人爭うてこれを求む。その趣一に儒教によりて勸善・懲惡を旨とせり。從つ

て人物の類型的にして個性の發揮に乏しく、極端なる善惡の權化にして人間味を缺如せるが如きは避くべからざる短所なり。されどその結構の雄大にして變化に富み波瀾の重疊たるはその類稀なりと謂ふべし。このころ、滑稽小說に名を得たりしは江戸の十返舍一九・式亭三馬なりき。一九の膝栗毛は旅の恥を書きずて、三馬の浮世風呂・浮世床は化政の社會を直寫して苦笑せしむ。

之を要するに、江戸時代ばかりその量に於ても、その質に於ても上下貴賤各種の階級に通じて、豐富なる文學を供給せるは前代に比なし。而して又その形式・內容共に先例の桎梏を脫し、直接に自然と人生とに應接して自由にその感想を述べ以て能く明治文學を產み出すに至れり。（藤岡作太郎著「新體日本文學史教科書」に據る）

十返舍一九　天保二年（一八三一）歿　年五十七か　參照（一三）卷二、九　鹽井川

式亭三馬　文政五年（一八二八）歿　年四十八

五　明治時代の文學

第一　小說

維新の偉業正に成りて開國の國是一たび定まるや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術・技藝を顧みるに遑あらざりき。況や美術・文藝のことの如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無數の古典は廢紙となりぬ。此の間にあつて纔かに微光を發せしものは、獨り新聞紙なり。新聞紙の刊行は、これを西洋に學びしものにして、當初は專ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど普通教育の制度漸く國內に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共

佳人の奇遇　東海散士柴四朗著
雪中梅　鐵腸末廣重恭著
經國美談　龍溪矢野文雄譯

に、新聞紙の經營者も亦是等の讀者に對して其の娯樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて、幕末以降久しく失意の地にありし戲作者が所謂續き物と稱する合卷風の小說を紙上に揭げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。從來筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の文藝の人心に影響することの速かなるを認めて、或は英佛の政治小說を飜譯し、或は新に架空の脚色を立てゝ自家の主張を具體的に說明せんことを企てたり。佳人の奇遇・雪中梅・經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調、時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、文學の眞諦を得たりといふに足らざりき。

硯友社　明治十八年尾崎紅葉山田美妙齋川上眉山等の結んだ文學同好の會

さもあれ、明治は既に十七八年を經たり、西洋の學術も技藝も稍〻咀嚼せられたり。世の先覺者はかの徒らに物質の皮相にのみ腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝・美術の評價も日に漸く高からんとせり。この勢に乘じて、坪內逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戲作者系の人々もこれに呼應して起てり。こゝに謂はゆる才筆家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て直に人生を描破せんとする者は、將に踵を接して出でんとせるなり。

思ふに新文藝の勃興は半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義は此に其の極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せ

られ、國語教育の奬勵、古文學の研究が隆昌を極めしはあたかもこの頃なりき。されど、新文藝の先達は、啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり。或は元祿文學に模倣するあり。我が文壇の泰斗として新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴(一)とは共に西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。紅葉が艶麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は、稍〻單調なりき。良〻久しうして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小說・冒險小說・俠客小說等の複雜なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敍したる所謂觀念小說、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小說を歡迎し、その取材は日に〳〵人生の暗黑面に向つて

參照(一)
卷一、
卷四、一〇 雪前雪後
卷六、一三 五重塔
卷九、四 猿蓑鈔
卷一〇、七 大丈夫の覺悟

進み去らんとせり。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清・日露の大役を經て、俄然として、一等國の伴に伍せり。國民の自覺と共に歐洲文學の思潮は盛に輸入せられ現實を凝視し人生の眞を寫すを以て文學の主要なる職分なりとするに至れり。この播種者は二葉亭四迷(二)なるが、自然主義の勇將として此の時代に活躍したるは國木田獨步・島崎藤村・田山花袋(三)等なりき。而して一面、坪內逍遙(四)は英文學を紹介し、森鷗外(五)は獨文學を飜譯するのみならず、小說・戲曲の創作に努めてその長老たる名譽を辱しめざりき。

第二　和歌(六)

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬・梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌・俳句といへば、專ら活社會と交渉なき閑人・隱

參照(二)
卷二、一三 ポチ
同、一三 二葉亭の文章
參照(三)
卷四、一〇 たき火
參照(四)
卷一、一五 文章の道
參照(五)
卷三、二四 長柄堤の訣別
卷七、一三 ヴェニスの商人
卷八、五 名殘の星月夜
參照(六)
卷五、一七 ヴェスヴィヤス
卷七、一 高瀨舟
參照(七)
卷六、一〇 父君よ

蒼虬　成田氏　俳人　天保十三年(一八四二)歿　年八十三

梅室　櫻井氏　俳人　嘉永元年(一八四八)歿　年八十

落合直文　明治三十六年歿　年四十三

伊藤左千夫　大正二年歿　年五十

參照(八)　卷三、五　葵

參照(九)　卷二、五　佛法僧　卷五、一〇　法隆寺

者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。かの國粹保存の論、國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門下生との手によりて、歌道はまづ青年社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。

次いで正岡子規は俳句革新の餘力を以て短歌革新の叫をあげ、萬葉集を揚げて古今集以下を斥け、客觀寫生を入門として實生活の印象を詠み出づべしと唱へたり。その主張は伊藤左千夫等によりて繼承せられ、以て大正歌壇の一勢力をなすに至れり。

第三　俳句(八)

俳諧には正岡子規出づるあり、天保の月並的俗調を排して天明の蕪村調を高唱し新聞日本に據りて天下に呼號せり。子規は

河東碧梧桐　名は秉五郎　明治五年伊豫松山生

外山博士　名は正一　東京帝國大學文科大學長　文部大臣　文學博士　明治三十年薨　年五十三

參照(一〇)　卷五、一五　新しい詩

參照(一一)　卷二、二六　春は來ぬ　卷三、八　登臨賦　卷六、七　勞働

天地有情　土井晩翠の詩集　明治三十二年に出づ

參照(一二)　卷五、二六　鷲

從來の傳統を破り、專ら獨自の見解を以て蕪村・芭蕉等を研究批判し、進みて眞實の描寫を鼓吹せるのみならず寫生文の流行をも促しぬ。門下に高濱虛子(九)・河東碧梧桐等あり。

第四　新體詩(一〇)

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は明治十五年ごろ外山正一等が試みたる新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍〻乾燥なるに慊焉たる者は中古語を以て、西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするもあり。三十年に至り、島崎藤村(一一)・土井晩翠(一二)二人嶄然として頭角を見し、藤村詩集は溫雅優美の調を以て、天地有情は縱横跌宕の風を以て、最も青年の間に喜ばれたり。

第五　散文

福澤雪池　福澤諭吉
福地櫻痴　名は源一郎　新聞記者　明治三十九年歿　年六十六
成島柳北　新聞記者　名は弘　明治十七年歿　年四十八
參照(一三)　卷四、二一　友に寄す　卷八、一六　世界の四聖
山田美妙齋　小說家　名は武太郎　明治四十三年歿　年四十三

更に純文藝の範圍を出ごて專ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池・福地櫻痴・成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、三宅雪嶺・坪內逍遙・森鷗外・高山樗牛・大町桂月等あり。(一三)その文各〻特色あり、長短ありと雖も、皆縱橫自在にしてよくその言はんとする所を言へり。

明治維新の當時は舊物破壞の氣勢甚だ猛に、江戸時代の平易なる通用文體を一變し、佶倔なる漢文直譯體の文を以て普通文と定め、法令制度より論說記事悉くこれによることゝなり、隨つて文藝小說も亦多くこの文體を用ひたり。されどかゝる不自然なる文體は永く勢力を有すべきにあらず。明治二十年ごろ山田美妙齋・二葉亭四迷二人相前後して言文一致體の小說をものしたる當初に於てこそ是非の論世上に喧しかりしか、三十二年正岡子規が寫生文を提唱せるころより次第に文壇の勢力となり、次いで自然主義作家の輩出して現實描寫をつとむるに至り、自ら口語體は一般文學を風靡するに至れり。

明治の社會が日本に於ける空前の變化なると同じく、明治の文學も亦從來に見るべからざる一大變化をなしたるなり。約言すれば明治以前の文學は概して理想的、技巧的、典據的なるに對し、明治の文學は少なくとも現實的、自然的、慣習打破的に進まんとする傾向を有せるものと謂ふべし。(佐々醒雪の文を參酌す)

六　大正時代の文學

第一　小說

大正時代の文學は、自然主義文學の衰潮に乘じてその曙光を發し來りぬ。而も、明治の末期に至るまで田山花袋・島崎藤村・德田秋聲・正宗白鳥等の作家は、各特色ある製作を出して、自然主義は、依然として文壇の主流をなせる觀ありき。この間に立ちて、唯一人滔々たる大勢の外に超越し、最後まで自己の個性を護り、異彩ある作品を多く出したる者を夏目漱石とす。吾人はこゝに大正當初の文壇の一重鎭として、漱石の名を特筆せざるべからず。漱石の才能は多面多樣にして、內容によりて樣式を變化し行き、特にその初期と晩年とは作風を殊にしたるために、容易に一の主義を以てこれを掩ふこと能はず。たゞその如何なる傾向を擇ぶにもせよ、悉く自然主義と立場を異にし、或は全く之と正反對に出でたり。自然派が頻に自己の作品の人生第一義に

徳田秋聲
小說家
名は末雄
明治四年石川縣
金澤市生

正宗白鳥
小說家
名は忠夫
明通十三年岡山
縣和氣郡生

參照(一)
卷一、二六　阿蘇
卷二、五　文鳥
卷三、四　深山椿
卷六、一　運慶
卷九、二　草枕

觸れたりと稱するや、彼は謂へらく、「その第一義とは生死海中に在りての第一義なり。若し生死の關門を打破して生死を眼中に置かざる人生觀を立し得とせば、彼等の所謂第一義は却て第二義に墮するにあらずや」と。評者或は漱石の態度を目して禪的といひ、俳諧的と稱し、低徊趣味と名づく。蓋し、その最も優れたる傾向は、英國派心理小說の脈絡を引ける作品にあるべし。ともあれ、その明色と倫理的意識と東洋趣味的の沖澹とは、相俟つて自然主義の暗色より救はれんと欲する讀者に多大なる慰安を與ふる力の籠れるは爭ふべからず。

曩に歐米文學の飜譯紹介をなして文壇を啓發せる森鷗外は卓然たる識見を持して歷史小說を創作し老熟の筆致、よく彼の該博なる學殖と毅然たる人格とを示せり。この他に耽美派と稱

武者小路實篤　思想家　文學者　明治十年東京生

トルストイ　Tolstoy (1828—1910)　ロシヤの小說家思想家

ドストエフスキー　Dostoyevky (1821—1881)　ロシヤの小說家劇作家

タゴール　Tagore (1861—)　印度の詩人

ロマンローラン　Romain Rolland (1866)　佛國の小說家戲曲家

せらるゝもの、前に永井荷風あり、後に谷崎潤一郎あり。その官能描寫の藝術的色彩と芳香とは、能く人心を惹くものあり。

當時、正面より自然主義に對抗して、來るべき時代精神の一面を暗示したるは武者小路實篤を始めとし、何れも白樺派の人々なり。白樺派は人道愛と個人的生命の光明とを高調する新理想主義の一團なり。その人生に對する態度は、畢竟肯定的にして、人類の將來は內部生命の飛躍によりて、無限の幸福に向ひ得べしといふが其の信條とする所なり。顧みるに明治末期より大正初期にかけて、著しき興味を以て我が思想界に歡迎せられたるは、露國のトルストイ及びドストエフスキーの論文作品にして、更に印度のタゴール、佛のロマン、ローラン、英のカーペンター等の思潮雜然として流れ入り、尙之に加ふるに獨のオイケン、佛

カーペンター　Carpbenter (1814—)　英國の思想家

オイケン　Eucken (1846—1926)　ドイツの哲學者

ベルグソン　Bergson (1859—)　佛國の哲學者

リヤリズム　Realism

のベルグソンの新哲學を以てせり。蓋し白樺一派の藝術思想はこれら文學及び哲學の感化によること最も多し。これらの思潮は飽くまで人間心靈の勝利を基調とし、創造的進化の新生活を謳歌することに於て到底人生の些事或は機械的なる運命觀にのみ停滯せる自然主義と相容るゝものにはあらざりき。

かく新理想主義の一方に崛起すると同時に、自然主義に取つて代りし純藝術派の諸新人は、皆現實主義の信徒たりき。現實主義といひ、寫實主義といひ、同じくリヤリズムの名に於て呼ばるれども、二者は元來その趣を異にせり。寫實主義は始めより主觀を交へず、專ら外面より事象を描かんとするものなれども、現實主義は、觀照に於ては科學的精確を尊ぶに拘らず、批判と省察とは飽くまでも嚴肅なる主觀に於てせんとするものなり。而

參照(二)
卷一、二〇　青の洞門
卷二、一〇　形里見弴
本名山内英夫
明治二十一年横濱生
參照(三)
卷一、一六　槍ヶ嶽へ
卷二、六　漱石山房の秋
卷四、三　大川の水
參照(四)
卷二、四　鞍馬の火祭

して我が國現代の作家は、深淺の差こそあれ、多くはこの主義に據るものゝ如し。曩に或は自然主義派に屬し、或は新理想主義派に數へられ、或は漱石の流を汲めるものにして、今日この現實主義に入るべきものもあり。菊池寛・芥川龍之介(二)は冷靜なる理智によりて人間心理と人生の現實相との矛盾を諷刺し或は之に新解釋を與へんとし、志賀直哉・里見弴(四)等は精練せる筆致を以て如實の自然を渾然たる藝術として創造するにつとめたり。

第二　戯曲

詩歌小説に比して劇文學の後れがちなるは何れの國に於ても然り。これ蓋し演劇は多數觀客を相手とするより演出上容易に根本的革新を許さゞるが故なり。日清役後、坪内逍遙は史劇の新作を試み、森鷗外は西歐諸國の新劇を紹介したれども、之を

參照(五)
卷六、一〇　父君よ

實演することは至つて少なかりき。明治末期に於ける坪内逍遙の文藝協會、小山内薫等の自由劇場、その他演劇に關する實際的啓蒙運動の起りしより、近年劇に對する興味は漸く文壇の中心をなし、戯曲の創作を試むるもの次第に增加せり。

第三　詩歌

短歌(五)・長詩の壇上には幾多の新人の輩出するあり。明治時代に於て、落合直文・正岡子規等が革新の鋤鍬を加へたる短歌の野は、大正の今日に至りて、いよ〳〵百花繚亂の盛況を呈せり。即ち幾多の短歌雜誌は刊行せられ、よく個性を歌ひ、實生活を詠じ、その用語に、取材に、各特色ある歌風を示せり。中にも興謝野寛夫妻の「明星」の復活と齋藤茂吉・島木赤彦等の「アラヽギ」派の流行とは最も注目に値すべし。

長詩壇も三木露風(六)・北原白秋等の專門作家の外に他の藝術家の之を試むるものもありて亦甚だ賑へりと謂ふべし。たゞ未だ眞の國民詩として誦すべきものなきに似たれど、その詩境著しく向上し、清新にして光明に富み、諷誦するに足るもの尠しとせず。又、童話文學と共に、新童謠の勃興せるは、兒童の世界の爲にも喜ぶべく、この點に於て北原白秋(七)・葛原(七)原酋等最も力を致せり。俳壇には曾て高濱虛子等が正岡子規の築きたりし「ホトヽギス」の古壘を守るあり。外に、「海紅」に據れる河東碧梧桐「層雲」に據れる荻原井泉水等の一派は、全く從來の季題趣味を脫し、自由に觀照の世界の一閃を捕へて之を印象的に吟じ出すを何て、同好者の共鳴する所たり。

第四　歐米文學の飜譯

參照(六)卷五、九斑鳩の宮

參照(七)卷一、九童謠五篇

歐米文學の翻譯の盛行せるはまた當代藝術界一般の要求を示せるものなり。我が印刷術の進歩は、世界如何なる國の文學をも自由に移殖せしめ我が國民をして坐らにして世界藝術博物館の廻廊に立つ思あらしむ。大正の初頭厨川白村「近代文學十講」を著し、西歐文學の諸流派を啓蒙的に說述するや、忽ち數十版を重ねたる事實に見るも、當時我が讀書界が、いかに新欲望に驅られたるかを知るべし。(千葉龜雄の文を參酌す)

七　現代の文學

第一　小說

自然主義の作家田山花袋は昭和五年病歿したれど島崎藤村・德田秋聲はなほ創作の筆を輟めず、正宗白鳥は評論に氣を吐けり。

大正時代に名を成し、今尚その活動を續くるものに、谷崎潤一郎・武者小路實篤・里見弴・志賀直哉・佐藤春夫・吉田絃二郎・菊池寛・久米正雄・室生犀星等あり。就中、說話の構想に巧みにして官能描寫に勝れたるは潤一郎にして、人類の幸福を强調して人道主義に徹せるは實篤、「まごころ」の徹底せると精彩の筆致に富めるとは弴・直哉等なり。

この外に通俗小說を以て名を成せるものは三上於菟吉・中村武羅夫・加藤武雄等あり。近時頓に勢力を得たる所謂大衆文學の作家には大佛次郎・白井喬二等其の他なほ多し。

茲に大正の末年より興り來りし新感覺派は一時、文壇を賑はしたりしが、やがて所謂無產派の作家にその地位を讓れり。無產派作家は大正の中葉より徐々に擡頭し來りしが、徒に宣傳に急にして、理論を事とし、勝れたる作品に乏し。此の間、嚮の新感覺派と謳はれしものは謂はゆる新藝術派を興し、活潑なる行進をはじめたり。新藝術派の中には自然主義の系統をひけるもの、理想主義的なるもの、耽美派の系統に屬するもの等種々雜多の觀なきにしもあらざれども、その作には何れも淸新の氣を藏し一脈相通ずるものあり。

要するに明治大正に興りし自然主義・現實主義・理想主義等の如き主義の色彩漸く稀薄なるを致し、文壇は今や既成作家と新興作家との二つに岐れたるものゝ如し。

又近時大量生產の結果しきりに前代及び當代の文學を結集し、或は世界各國文學の飜譯せらるゝあり、所謂圓本の流行と共に讀者層の擴大せられ廣く一般に流通せることは前古未曾有の

事なり。

第二　戲曲

「戲曲時代來る」と謳はれしこと一再に止まらざれど依然として振はざるは戲曲なり。但小山内薫等築地小劇場に據りて盛に外國作品の演出紹介に努めしがやがて新作をも上演するに當り、一時頓に活氣を呈じたり。昭和三年薫の歿するや新劇は頓挫を來し、舊劇獨りその勢力を振ふものゝ如し。作家としては中村吉藏・山本有三・眞山青果・岸田國士等あり。童話劇の作者には久保田万太郎あり。

此の間にありて坪内逍遙が二十年の努力をつゞけて沙翁作品全部の飜譯を完成せることはその勞作感謝せざるべからず。

尙映畫は今や新しき藝術形式として着々その力を增し、近時有

參照(一) 卷四、三三 西鄕と大久保

參照(二) 卷七、三三 ヴェニスの商人

聲映畫の改良せらるゝあり、その將來は注目すべきなり。

第三　詩歌

明治時代に一大革新を行はれたる和歌は、依然としてその進歩を續く。子規の系統を引けるアララギ派は大正の末年に島木赤彥を失ひしが、尙齋藤茂吉・平福百穗・中村憲吉・土屋文明等あり、精進怠らず。「心の花」の佐々木信綱、「潮音」の太田水穗なほ一方の雄なり。嘗て明星に據りて天下を風靡せし與謝野寛・晶子の作に淸新味の少きは惜むべし。この外に尾上柴舟・北原白秋・窪田空穗等あり。又傳統の句高き和歌の世界にも口語歌を唱ふる聲漸く聞ゆるに至れり。

俳句も亦子規の系統をひけるホトトギス派最も盛なり。高濱虛子は之を主宰す。河東碧梧桐・荻原井泉水また新俳句の運動

參照(三) 卷六、一〇 父君よ

參照(四) 卷五、一九 山國の歌

卷一〇、三 歌の調子

參照(五) 卷二、一四 月の洞庭湖

を繼續せり。詩の運動は盛大なりし大正時代を承けてやゝ寂寥を覺ゆ。作家には野口米次郎(六)・千家元麿(七)・富田碎花・河井醉茗・百田宗治・室生犀星等あり。譯詩は堀口大學(九)の名最もきこゆ。尚歌謠の流行著しく、北原白秋・西條八十・野口雨情等の作頗る多し。童謠(一〇)には白秋・八十・雨情と共に葛原茲・河井醉茗等の多年啓導の功沒すべからざるものあり。

參照(六) 卷三、一三 富士の靈
參照(七) 卷四、一五 雁
參照(八) 卷六、一三 太平洋の岸
參照(九) 卷四、一三 夕ぐれの時
參照(一〇) 卷一、九 童謠五首

師範國文 第一部用 卷十 終

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

大正十四年十月廿七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十三日修正再版發行
昭和五年八月三十一日修正三版發行
昭和六年一月二十五日修正四版印刷
昭和六年一月二十八日修正四版發行

定價
卷一 金六十九錢
卷二 金六十七錢
卷三 金六十三錢
卷四、五、六、七、八 金六十一錢
卷九、十 金四十九錢

編者　東京市小石川區高田老松町五二番地　吉田彌平
發行者　東京市神田區神保町一丁目五番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區神保町一丁目五番地　光風館書店（電話神田三〇八七番）（振替口座東京三二七番）
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地　大日本印刷株式會社　根本力三

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

明治三十二年

文庫
31
280
広島大学図書
2000054280